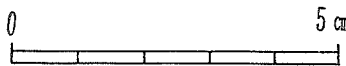
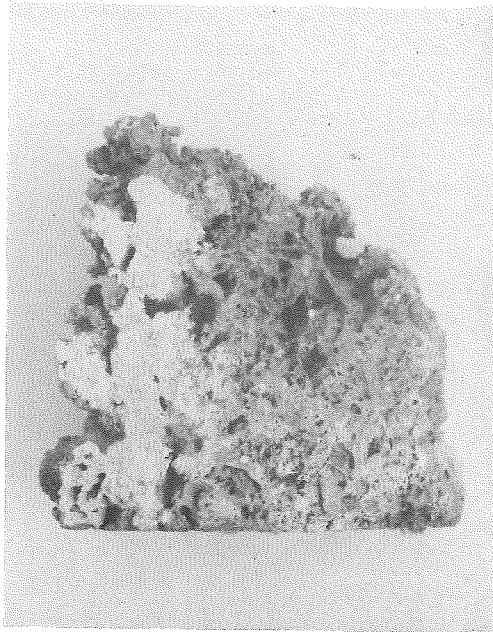


潮流

第5号

目次

・真金ふく島	平山武章	1
・中国江南の旅(その1)	高重義好	5
・熊毛入道について	三浦安徳	14
・アカホヤ火山灰の研究史	成尾英仁・奥野 充	16
・今平一号墳に関する反省	上妻紀男	23
・民俗資料による出土する石錘の検討Ⅱ	鮫島安豊	25
・大花里一之鳥居貝塚採集の土器(2)	関 一之	29
・資料紹介	鮫島安豊	34



復元・再生された種子島鉄



国上太田出土の鉄滓

《表紙解説》

種子島の砂鉄を使い古代製鉄法により、再現された鉄

昭和58年種子島開発総合センター（前：種子島博物館）の落成シンポジウムに出席された大同工業大学の井塚政義教授（横井助教授ほか学生を同行）は、西之表市石寺海岸で開発総合センターが再現した「ねこ流し」と呼ばれる浜砂鉄選別法により選別された砂鉄を大同工業大学に持ち帰り、古代製鉄の再現に取り組んだ。表紙の写真（左）は、その実物である。写真（右）は、西之表市国上太田出土の鉄滓である。

再現の様子は、中部地区のマスコミで大きく取り上げられ、中部毎日新聞に、以下のように報道されているので紹介したい。

・・・（前略）再現したのは、鑄造工学教室（横井時秀教授）の学生ら。・・・直径20センチ、高さ60センチの円筒形簡易炉を用意。・・・砂鉄6キロを炉内に入れ、雑木炭で約2時間熱し続けた。温度は、現代製鉄より約1,000度低い1,500度台で、古代とほぼ同じ製鉄法。学生らが炉内から取り出すと、赤々と溶けた鉄になっていた。・・・炉の遺構も発見され原料の砂鉄産地もあるが、当時の製鉄法でその砂鉄から本当に鉄ができたかの実験は、今までなかった。横井教授は、「現地の砂鉄は、かなり純度が高く、当時の技術でも十分鉄ができたはず」と太鼓判。（以下省略）

現物は種子島開発総合センターの製鉄関係資料コーナーに展示してある。

編集事務局からのお知らせ

種子島考古学研究会では、会誌『潮流』に掲載する原稿を募集しております。本誌は、種子島の歴史が有史以来、連綿として潮の流れを通して伝播されてきた事実を語り、更に学問的に考古学、民俗学などあらゆる方法で究明することを目的として発行されるものです。多数の話題・情報の提供を歓迎します。会誌の発行は、春と秋の年2回の予定です。原稿は随時受け付けております。投稿予定の方は、種子島考古学研究会編集事務局までお送りください。

原稿送付先：〒891-31 鹿児島県西之表市西之表7465 鮫島安豊

真金ふく島

平山武章

よもぎの力

昭和三十年代の前半に発掘調査された広田は、種子島を弥生文化の第三ルートとして位置づけ、鉄砲伝来の島を更に有名にした。

ここ広田から出土した中国周時代の饗鬚文様の貝札、秦時代の含蟬、漢時代の隸書体の文字。それらは中国では玉を素材とした物だが、種子島では、地元産の貝を素材として、見事な彫刻である。

この工作には恐らく鉄製の利器が使われたものであろう。石ではあの鋭い彫りは無理と思われる。種子島には弥生時代の鉄の釣針三個の出土例がある。

この鉄製利器を考えると、私は神武天皇の国土平定に使われたとする利剣、布甬御魂剣を連想する。

製鉄という極めて高い技能は、まず火切り臼と火切り杵で採火するが、その際とくに大事な物は燃え草である。蓬の葉裏の毛を集めて乾燥させたものであるが、この蓬を種子島では「ふつ」という。ふつの方言圏は、鹿児島、宮崎、大分、佐賀、長崎のそれぞれの一部である。この方言地域九州は、天孫・ニニギ族の活動の舞台だったところ。

布甬御魂剣と種子島とのかかわりを単に神話の延長線上でのみとらえたくないと思う。

面と瓢箪

南種子の下中には「炭焼小五郎」説話が残っている。これは嘗って此処に鋳物師が滞留したことを示すものと考えられそうだ。彼等の本職は鉄作りであるが、副業の炭焼きが時にはその生活を支えた。島内の各地に「金山節」がある。これは「ひょうたん踊り」とも言われる男だけの踊りで、外輪の踊り手が仮面をつけることから「めん踊り」で親しまれている。

この仮面は、昔の踏鞴吹き作業場で、赤熱の爐に砂鉄を万遍なく振り撒く際、その熱から顔を護る大事な道具だったと私は思う。そして瓢箪を縦割にしたものは、砂鉄を掬い撒く作業には無くてはならぬ道具、そして日常生活に欠かせない柄杓、すなわちひさごであった。私が面踊りと鋳物師を一本の糸で繋ぐ所以であり、こうした職能人の巡廻・滞留を確信する理由でもある。

この「面踊り」の歌詞に

「金山に三味線ないとは誰が言うた、あればこそ、たけ女もひいつひかれそう」所によつては、後の句を、たけ女を乗せて駒でやろうと歌うところもあるが。これは神聖な踏鞴場は女人禁制だったことと、この特殊な技能集団に対する、里人の揶揄ふうなそねみと、乙にかまえた相手側との、歌合戦の趣きが面白いところであろう。

陸を馳る衆

下中の真所八幡に県の指定文化財の鰐口がある。直径三十糎、白銅の厚さ三糎、見事な仕上がりである。その銘文は「応永三十三年、願人、早谷部徳永」と彫つてある。

此の年は(1426)年で、まだ八幡神社とは呼ばれていない時代である。そこで此の願人、早谷部徳永なる人物を考えてみたい。

まず早谷部であるが、これは昔の豪族の部民の職業のうち、走り使いをするもの、すなわち丈使部のことと思われる。恐らく地頭か郡司から、陸上の運送にかかわる仕事を与えられていたものではあるまいか。しかも彼は冶金・鍛冶の技能者でもあった。

この真所八幡の南一帯は字一の坪であるが神社の東は「かじやのその」と呼ばれている。

その系図は高望王の五男良文からの出で、その三代目が三浦姓の義親、それから三代目が牧之瀬を名乗る義隆、そしてその子義国が種子島に下り、南種子に住みついたが、直接の理由は、義隆の父の敗戦による死亡で、失意の島下りであった。

義国から四代目の義宗が徳永を名乗り、その子義則もその姓で通したが、その長男義景は牧之瀬に復り、その次男忠助の家系が徳永姓を継いで、古田・安城・荃永・深川・西野へと一族はその血脈を上げたとみられる。

義景が牧之瀬に復姓したのは、種子島家の家臣団に加えられたことによるもの。そして、義景から四代目が牧瀬と改姓して、屋敷を字田中(西之表市東町公民館の南側)に与えられて、刀鍛冶として、一島の需用にこたえていたのであり、その一族は鋳物師(野鍛冶)としても活躍、その製品や副業の木炭の輸送にもその一族が当たると見られるのである。

海を走る衆

巡廻技能集団は、他にも製塩の塩司も居る。家譜には初代信基が鎌倉から貝太郎、貝次郎の二人を伴って来たと書いてあるが、種子島文書では、信基の下島は「路頭困難で、数年筑後・肥後の国に滞留」したとも書いてあり、要は、竹で編んだ芯に両面から漆食を塗

って乾燥させたあじろ釜を使う塩焚き技能者が、島治の安定を見て、渡ってきたものと考えられる。

他に船巧者集団がある。操船、造船、潮見、風見等の熟練者を二十家と言い、種子島氏の普代の家臣団とされているが、その二十家伝によると、

- ◇ 家臣、松下氏、田中氏、主人へ供奉いたし下島。
- ◇ 家臣、三浦氏、御跡を慕い日州庄内へ下着致し、八ヶ代郷を手に入れ居住、依て八ヶ代と改名致す。主人種子島に下向の由承るに付、種子島に下着いたすと言ふ。
- ◇ 家臣、樋口氏は日向に差置かれ御下向後召寄せられ候。
- ◇ 家臣、中村氏は屋久島へ差置かれ御下向後召寄せられ候。

これに関し種子島家文書では、

- ◇ 廿人之事不存候。さりながら本筋は松下、中村、山縣、屋ヶ代。其外不存候。
- ◇ 日高、榎本、山崎、松下、屋ヶ代、中村、池村、牧、荒木、八板、此衆は御親

を志たひ被罷下候由承候。何方より被罷下や不存候。

- ◇ 羽生，鯨島，有苗，樋口，岡苗，此衆は次第に方々より被罷下候と承候。鯨島ハ鹿兒島より被罷下候よし承候。有苗ハ根占殿御連れ様。此元ハ御下しの時御共申して被罷下り候と承候。岡苗ハ細島より妙長様御下向候時御供申し御下候由承候。樋口ハ志布志より此元罷下安堵申し候由承候，其外ハ不存候。右之家々の高下ハ不存候。

とまれ二十家という一団は，種子島がすでに相当の海上勢力を持っていることを知り身を寄せたものと思われる。

まがね長者

足利幕府が成立して，技能種子島は種々の面で注目されたことは確かである。たとえば將軍義晴の管領細川高国が，種子島に依頼して遣明船を造ったのは大永元年(1521)のことである。この造船技術が世に喧伝されていたからであるが，船釘が質量ともに誇るべき地位にあった証左とも言えよう。

それ以前，文明元年(1469)からおよそ90年間にわたる内容の「善隣国宝記」の中に，將軍義政から明国皇帝への献上品目が列記してある。その中で特に目につく物，しかも武器に次の三つがある。

- ・黒漆鞘柄太刀，壹佰把。
- ・槍，壹佰把。
- ・長刀，壹佰把。

百把と言えば千本という大きな数量，太刀，槍，長刀と，合わせると三千本の武器である。もちろん，勘合船の積荷も大体，これと同様のものだったことは知られている。国内の鉄の需給は逼迫するようになった。鑄物師たちの目が種子島に向かったのも納得できる。

種子島は無尽蔵の砂鉄があると考えられていた。そして製鉄用の木炭も，その原料林は20年サイクルで伐採できた。そして弥生時代からの技能もあつた。当然，異国，他邦との交流もあつた。

天文12年の鉄砲伝来に際し，国産銃を完成した八板清定も，鉄をもとめて来島した巡廻鑄物師の一人だった。その系図の冒頭は

◇ 清定，金兵衛尉

濃州関の鍛冶，刀剣を善くし産業の為に来る。

なお，女の出生が，大永七年丁亥(1527)であり，清賀の出生が享祿四年辛卯(1531)母は共に樫原氏の女・カメである。

これから判断できることは，金兵衛の来島は，大永年代の初期か，あるいは永正年代の末とも考えられる。それまでの金兵衛の経歴は系図には書く程の資料はなかった。来島後に作られた文が，産業のため来る，刀剣を善くす，としてあることなど，当時の時代背景を如実に示している。

恐らく金兵衛は来島時は三十歳に少し前と思われ，金屋(製鉄・鍛冶)衆の一人として来島，明国向けの商品を作ったと想像できる。

そして樫原カメ女を妻として，女と男をもうけた。このことは系図が克明に記しているところである。

鉄砲作りに当って，その大役を受けたのは金兵衛だった。では牧瀬鍛冶は何故わ

き役に廻ったのであろうか。

これに関しては、島内の士分の者の佩刀の確保もまた、極めて重要なこととして、島の首脳達が考えたからだと思はれる。そして一方の新奇の武器・鉄砲を作るその成否は、予断できることではなかった。来島20年そこそこの、新規参入の鍛冶に白羽の矢を当てるしかなかったことが、金兵衛に決死の覚悟をうながすことになり、そして予期せぬ芳名を歴史にきざむことともなったが、彼にとっては好運なめぐりあわせだった。

種子島の鉄と伝統技能、巡廻技能集団の活躍、それを商業ベースに乗せた船手衆、それらを駆使して、江戸初期までの種子島家は、伝説の炭焼小五郎ならぬ真金長者となったことは事実である。

中国江南の旅 (その1)

—種子島のルーツを求めて—

高重 義好

はじめに

中国大陸の旅といえば聞いただけで夢とロマンを感じる人も多いだろう。その大陸を自由に旅するとなると生易しいものではない。一口で言えば十二億の中国人民の一人になり切る覚悟がなければ、何でも見てやろうの旅は困難だ。

人間の生きる基本的なもの、それは外国旅行の必須条件に通ずると思われるが、それを世俗的に快食、快便、快眠とするとこのどれをとっても中国の現実は馴染みにくい。

中国料理は日本人には割合親しまれている料理だろう。ところが本場の中国に行くとなかなか喉をとおらない。何故か。日本人が一番気にする衛生とサービスが全く欠けているからだ。これは地方に行けば行く程ひどくなるが、北京の例を挙げると、私が北京で暮している時種子島から従弟がやって来た。私の行きつけの一番よい食堂に案内した。ところが彼は顔をしかめて入口で動かない。「くさか」、「きつさなか」とついに入らなかった。入れなかったのである。私も北京で暮し始めた頃この食堂になかなか入れなかったことを思い出した。彼を前門(北京の繁華街)の有名な食堂へ、これも有名な北京ダッグを食べに連れて行った。彼はそこの服務員の態度、私と彼女のやりとり(普段と変わらないのだが)に啞然として、その剣幕に恐れをなして食欲もなさそうであった。彼は一週間で帰って行った。気の毒であった。

快便、これがまた大問題、北京随一の繁華街、王府井大街の公共トイレもドアも間仕切りも何ものもないオールオープン。真ん中辺に外人用のつもりか、しゃがんだら身体がかくれる間仕切りのあるのが二つ三つ(ドアはなし)、他は穴があるだけ。地方に行くと書くのとはばかる惨状だ。手洗い用の水もあつたら奇蹟だ。今何処でも有料トイレが大流行だが、満足な水道にお目にかかったことはない。私は何時も大型の解放軍の水筒を持ち歩く。水の補給用ではなくて手洗い、洗顔用だ。天安門広場で百万人の大集会が可能なのは、その広さもさることながら、その生理現象の処理の習慣にあると思う。広場の周辺に長方形の穴が無数にある。普段は鉄板がかぶせてあるので気付かないが、必要な時に鉄板を外せばトイレになるのだ。しかも完璧な。

快眠について、私は5元(100円位)以下の宿に何回も泊った。今回の旅でも貴州の片田舎(双井郷)で、郷政府の世話で二元の宿に泊った。こんな宿がどんなものか想像して貰いたい。私は日本でもホテルに入ったら先ず毛布の襟元が黒ずんでいないか点検するクセがついてしまった。中国の地方を歩くには敷布用の木綿(現地調達)とバスタオル(首に巻いて寝る)及び箸(箸箱)は必携である。

中国人はトイレでお尻が丸見えでも平気だが、日本人には耐えられない。私は今でもこれだけは出来ない。日本人は銭湯で裸になることは抵抗がないが、中国人は共同シャワーが使えない。裸を見られるのが耐えられないのだ。中国式銭湯は忽論個室だ。これは、どちらも単なる習慣の問題で文化の問題ではない。私の中国朋友

は水洗トイレで用を足すのに、わざわざドアをあげ広げるのには閉口した。しかも不思議に水を流さない。そのままにしているのだ。彼は大学教授である。

中国の旅はくわしい日程をたてても仕様がな。行き度いところを幾つか拾い出せばそれで終りだ。後は現地に入り正確な情報を集めて行動すればよい。旅行の予約制度は中国にはない（外国人は特権として中国国際旅行社〔CITS〕を通し予約が出来る。自由旅行者はこの特権を放棄しているが、片方ではこの特権を留保しているところに成り立つ）。予約が出来ないのは不安であり不便であるが、それを逆手に取ればのんびりした旅が出来る。気に入ったところは何日でも腰をすえればよい。そのかわり興味がなければ素通りすればよいし、新しい情報が入ったらそこへ足を向ければよい。つまり足の向くまま気の向くまま放浪すればよいのだ。そんな気ままな旅こそ時間も空間もケタ外れに大きな中国では最も似つかわしい。

私は九十年十月、久し振りに大陸へ旅立った。今回は江南地方を上海と武漢を據点にして歩こうというもの。目指すのは沿海方面と湖南、貴州方面で約二カ月。種子島のルーツの地と仏教、道教の聖地聖山の巡礼、少数民族の自治州に入り、少数民族の村々を訪れるというのが目的である。

本稿では沿海方面（江東）を若干述べる。

1. 上海をかけずり回わる

天安門事件後初めての大陸行で多少の不安があった。が、福岡から飛んで上海の常宿、上海外国語学院招待所までトントンと事が運んだ（中国の大学はどこも外国人用の宿舎があり空室があれば泊めてくれる）。海関（税関）も何時もの通りノーチェック、団体客に押される様に外へ出るともう真つ暗（午後7時15分着）。信じられないことだが外は街灯一つない暗闇。チラチラする出租汽車（タクシー）の屋根灯を目ざして行くと、親方らしい男が近付いてきて外国人とみてか馬鹿でかい車を手配してくれた。運転手も人の好い男で荷物をトランクに押しこんで慎重運転、一時間もかけて招待所の玄関口まで運んでくれた。おかげで久し振りの上海の夜の街をじっくり観察出来た。と言っても薄暗い中におびたらしい人の群が右往左往するのを見ただけだが。

先ず皮切りの旅は沿海方面を寧波、普陀山（舟山群島）、紹興（会稽）と回わる旅だ。翌日から早速旅の準備を始めた。先ずしなければならないことは、①寧波行きの火車票を手に入れること、②武漢行きの船便を調べること、③金の調達などが主な仕事、これだけに三日も上海中をかけずり回った。どういう風にしたかというと、①火車票は、上海火車站の軟座候車室（一等車待合室）の中に外国人用切符売り場がある。但しここは当日売りだけ。事前に購入出来るのは南京路の中国国際旅行社上海支社で五日前から全国全線の切符が購入出来る。ここで寧波行き特快軟座（特別急行一等、61.5元）が買えた。②沿海方面を終ったら出来るだけ早く長江（揚子江）を遡行、武漢に移動し次の旅行の準備をしなければならない。長江には船着き場が幾つもあり切符売り場もあってダフ屋が横行し雰囲気が悪い。やっと十六舗の船着き場近くに武漢行き切符売り場を捜し当てた。カンバンがないので見過ごして終いそうな入口に入り、階段を上ると穴ぐらのような二階にあった。行き先別に窓口が並んでいて、切符の有無の掲示もある。三日前から買える。③は違法だが地方を歩くには人民ピーが必要で気が重いがやらねばならない。中国は独特な通貨

制度があつて、外国人用(FEC)と中国人用(人民ピー)の二本建。外国人はFECの使用しか出来ない、ホテルや交通機関、友誼商店など国営機関は全てFECでなければ受取らない。しかし地方に行くと反対にFECは受け取り拒否にあつたり使いにくい。それで地方を歩くには人民ピーの方が便利で必要。上海一の繁華街「南京路」で「チェンジマネー」とか「換錢」とか声をかけてくる。FECや円を人民ピーに交換しようというサインである。和平飯店の周辺では日本語で声がかかる。何れも絶対に手を出してはならない。大方は巧妙に持ち逃げされる。短期旅行者は人民ピーは必要なく、且帰国の際日本円に再両替しようにも外貨には換えられない(FECは換えられる)。私は某所で女親分から直接1(FEC):1.2(人民ピー)で交換した。旅の準備は終つた。身の回りの品をリュックにつめ後は招待所に預け、身軽になつて寧波行き午後11時15分発の夜行に乗つた。

一等は軟座候車室から直接列車に乗れる。まるで敗戦直後の日本の国鉄の旅を再現したような二等の騒ぎをしり目に乗つてみて面喰つた。座席指定なのにどこにも座席番号が書いてない、それでいてもう大部席が埋つている。誰かに聞かねばならない。人に物を尋ねるのにも要領がある。普通話が分る人かどうかよく見極めてから聞かねばならない。そばに背すじをシャンとのぼし端然と座っている幹部らしい人に聞いた。彼は座席の背もたれのシートをめくつてみせた。何とそこに番号がかかれていたのではないか。また一つ経験を積んだ。

この列車は楽しい列車だつた。一等車のせいか若い女と年輩の男の列車員がいて、男の方が湯茶のサービスをしてくれた。このサービスが素晴らしい名人芸、片手にブリキの大きなヤカンを持ち、それを高々と持ち上げ、片手にフタ付の茶わんをつかんで、フタをあけると同時に一気に茶を注ぎ、フタをしめるとサッと客の前のテーブルに置く。ホンの一瞬の早技に乗客は見とれ且大喜び、おかげで陰うつな中国火車の旅もなごやかな旅になりそうであつた。茶わんが空になると直ぐやってきて得意そうに冴えた腕をみせてくれる。こういう時のために空港で買った五本入りのセブンスターを進呈、隣りの皮ジャンパーの男にも友情のしるしに一箱、彼はお返しをつもりか続けて何本も煙草をすすめるのに閉口した。

2. 徐福と亶州

今回のコースは種子島のルーツの地と観念する私にとって、永年暖めてきた旅だ。舟山群島への海の旅があるので、うまく計画通りにいくか心もとないが、普陀山は中国仏教四大聖地の一つ、この巡礼も永年の夢だ。この島までの交通も往時の種子・江南ルートで是非通つてみたいところだ。

この地方は春秋戦国の世(紀元前800~300)越国のあつたところ、越国の都が会稽で今の紹興だ。紹興の町の南に越王勾踐が呉王夫差の追求を逃れて一時身を隠したという山がある。会稽山という。また「会稽の恥」という言葉も有名。これは夫差に破れた勾踐がその恥を晴らそうと「臥薪嘗胆」、ついに復讐をとげたという故事に由来する。

三国時代(220~280)、ここは呉国である。黄巾の乱(128)に活躍した武将孫堅の子の孫権が独立して建てた国だ。『三国志』呉書巻二 孫権伝に「亶州」と「会稽」の文字が見える。孫権は黄竜二年(230)正月、衛温と諸葛直の二將軍に一万

の兵士を与えて夷州及び亶州を求めさせた。孫権伝に、

亶州は海の中に在り 長老伝えていう
 秦の始皇帝は方士徐福に童男童女数千人を連れて 海に出 蓬萊の神山と仙薬を
 求めせしむ がこの州に留まり帰らず。
 代々続いて数万家あり その人民 時に会稽に出て商い 会稽の東側の人も
 海に出て風に流され 移って亶州に至る者あり

云々とある。

この文の前文の徐福の条は『史記』にも似た記事があり、これをもとに三世紀に編されたもの。徐福は前三世紀の人物で『史記』の編者司馬遷は七十年位後の人、徐福について確かな記憶の残る頃の人だ。それに事実立脚するという編集方針を貫いた人で、『史記』の信憑性は極めて高いとされている。従って徐福が秦の始皇帝をだまくらかし、たくさんの金品と数千人の童男女、技術者集団をせしめて、東シナ海へ乗り出し逃亡したことは、中国も日本の学界でも歴史的事実として評価されている。

後文は黄竜二年(230)当時の亶州(人)の動向を描写したもので、亶州の人が商売のために会稽(紹興)に来ていること、また会稽の人が亶州に漂流して住みついた等、亶州と江南の交流が描き出されている。この部分について『後漢書』東夷伝にもある。

世々相承は 数万戸あり 人民時に会稽に至り 商売す
 云々。この数万戸が気になるが気になる理由は後で述べるが、素直に中国式「白髪三千丈」的表現と考えたらどうだろうか。

この二將軍は夷州までは到達し捕虜数千を得て帰ったが、亶州には到達していない。当時の人々も亶州は会稽の東方海上遙か 所在絶遠 と認識していた。この夷州は台湾とするのが定説だ。それでは亶州はどこか。諸説があるが種子島という学説も有力である。

種子島が日本の歴史に始めて登場するのは七世紀後半、日本列島激動の時で大和政権は初めて上京した種子島人を優遇している印象を受ける。その種子島が『史記』など幾つかの史書に見えていることは注目せねばならない。或は大和朝廷は之等の中国史書を通して、亶州(種子島)を知悉していたのかも知れない。孫権は亶州に到達できなかつた二將軍を処刑した。亶州はそれ程重要であつた。

秦の始皇帝は今から二千二百年前の人、我が国の弥生時代前期の皇帝だ。この時期は南種子町広田埋葬遺跡の上限の時期と一致する。広田遺跡からは中国系文様を刻んだ貝札や竜佩、南島系列の貝製品などが多量に出土、なかでも後漢時代の隷書体といわれる「山」と読める文字を刻した貝札は有名。これ等の出土品から、広田弥生人は中国文化の影響を受けた人々であることがあきらかにされている。同じ系統の貝札が琉球、奄美の島からも出土しているが、これ程強い中国文化の影響を止めているのは今のところ種子島だけである。

出土した人骨は弥生人の特徴を具備し、縄文人(長崎鼻貝塚出土、南種子町)と異なるといわれ、九州本土人とも明らかに差がある。しかも南九州に居住していた熊襲・隼人等とも異種とみられている。従って種子島の弥生人は九州本土から南下の影響よりも、南方から北上の影響が強いのではないかと思われる。

徐福伝説は九州をはじめ遠く東北まで日本各地にある。最近吉野ヶ里遺跡の発掘

により徐福は中国山東半島から、有明海に入ったという説が注目されている。紀元前三世紀の造船、航海の技術からすれば徐福や数千の童男女、技術集団を乗せた大船団が、徐福の指揮で一糸乱れぬ航海をした筈はない。東シナ海上でバラバラになり朝鮮半島や日本列島、西南諸島へ着岸した筈だ。「将権伝」や「呉書、東夷伝」にある徐福が亶州に留まり子孫が数万戸に達したというのは、亶州が種子島である限りとてもそれ程のの人家の存在は考えられない。徐福が種子島に来たかどうかは今となつては調べようがないが、一旦種子島に着岸し再び北へ向かった可能性もある。確実に言えることは山東半島を船出した数千人のうち、数は分からないが幾らかは種子島にも着岸し住みついた。この事は誰も否定出来ないだろう。前三、二世紀の航海であれば自然の理である。そして彼等が先住民と協力し融和して携えていたとされる五穀の種や、鉄器や新技術でもって種子島の新文化—弥生文化の担い手となった。この人々が広田遺跡を営んだという仮説があることは周知の通りだ。

種子島の海人の特性は前述の中国史書が述べている江南との交流—この江南、特に沿海地域の系統に認めることが出来る。二年前福建から発進した擬装難民のオンボロ船が続々と九州へ着岸した。このルートはもともと種子・江南ルートで海上の道なのである。このルートから江南の人も物も入り、これ等もまた種子島弥生文化の担い手として一つの波を形成したと思われる。

列車はこの様な想いに耽る一人の異邦人を乗せて一路南下していった。

3. 寧波断想

朝7時15分眠っている間に紹興を通過、定刻に寧波に着いた。朝もやの中を動き始めた町を歩いて寧波飯店に行く。意外に都会的町並みで、飯店（ホテル）も堂々とし服務員も腰が低く親切である。

寧波では港と河姆度遺跡（前3000年頃の水稻作文化の遺跡）を見たいと思った。フロントで聞くと服務員は遺跡は聞いたことがないという。彼等の話を聞いていると、どうやらこの町は歴史に冷淡な様で、動物園はあっても歴史館も博物館もない。「中山東路」の旅遊社で聞いたらどうかという。旅遊社でも要領を得なかつた。西安（旧長安、陝西省）の半坡遺跡（仰紹文化遺跡、前4000年の村落がそのまま博物館となっている）のような整備された遺跡を考えていただけにがっかりした。

碼頭（港）まで歩く。碼頭は甬江の河べりにあり四方から運河が集まって、大小の舟がびっしり。太いマストの帆船も未だ現役だ。船首に大きな目玉を描き船尾が空中に突き出た独特のスタイルの船、原色の剥げ落ちた船腹に幾人もの人影が動く。日本ではとうに廃船になっている様なオンボロでもここでは主役だ。汚れるだけ汚れた漁船がすさまじい爆音を河面一パイに撒き散らしながら下って行く。港町の活気が腹の底に響くように伝わってくる。

寧波といえば日本人にとって懐しい響きを持つ港町だ。室町時代の日宋貿易や和寇など日中交渉史を思い出させてくれる。それよりもずっと昔、この辺りが種子島のルーツの地と観念する私にとって、その道すじの河を眺めていると格別の感慨がわいてくる。日本の港とまるで違う荒々しさ、たくましさ感動しながら、そこに太古以来の息吹きを感じた。

近くの港務客運站に行く。広場は大小様々の車がごちゃごちゃ。屋台の果物屋も土産物屋も食堂もごちゃごちゃ。おもちゃ箱をひっくり返した様な喧噪の中を切符

発売の窓口へ行く。明日の普陀山行きの切符が買えた。午前7時30分発の二等（中国の船は何故か二等が最上級、17.3元）、中国では切符は買える時に買わないと明日買える保証はない。寧波の交通地図と普陀山の案内図も買えた。これで今後の日程の見通しもついた。

午前中は港付近を歩いたが午後は七塔寺と天一閣へ、明日から二、三泊の予定で普陀山へ、再び寧波へ戻って一泊し翌日一天遊（一日観光バス、先述の旅遊社が仕立てている）で奉化方面（蔣介石の故里など、私は農村を見たいので）へ、夕刻の火車で紹興へ移動と日程を考えた。

七塔寺は山門前に七基の五輪塔のある古ぼけたお寺で、ここで中国ならではの面白い体験をした。入口で品のいい老僧に会釈すると柔らかな笑顔で「何処から来たか」と聞かれた。よくされる質問だが私は「来北京」と、「来日本」の二つの答えを準備している。時と場合で使いわけているが、この時は「来日本」と答えた。すると「三十何才なりや」と聞かれた。幾ら何でも六十過ぎの老人に三十何才とは、余りのことに本当のことを言いそびれて「四十才」と答えた。嘘も方便のつもりで二十何才もサバを読んで終わった。会話の流れで「貴僧は何才におなりで……」と丁寧に尋ねた。心中、七十才位かと思いつつそれ位を期待していた。ところがびっくり仰天、我が耳を疑った。何と「三十六才」。中国人は年令よりも老けてみえる人が多い。しかしこれは酷すぎる。

一瞬、日典上人（西之表、川迎の産、種子島の宗教改革の口火をきり種子島法華宗の始祖となる）の顔が頭をかすめた。室町の中期、彼が奈良に赴いたのは四十才過ぎであった。その頃の彼もこの僧のようにヨボヨボだったに違いない。それでも奈良へ赴かざるを得なかった当時の種子島仏教の異常さを、この僧を通してまざまざと感じた。日典は種子島々民を精神的に解放した。が、この僧の一生は何なのだろうか。まじまじと顔を見た。矢張り七十才の柔らかな老僧の顔があった。

天一閣は寧波飯店の近く、屋敷町を思わせるような閑静な場所にある。ここは中国最古の蔵書処として有名。今は資料室にその片鱗を残すだけだが庭園がすばらしい。1500年代の建物と庭園がよく調和し、先き程見た活気に満ちた港風景とは正反対の静寂な場所、寧波は歴史が古いだけに文化的香りの高い世界も持っていたのだ。

中国の町は何処でも名園といわれる庭園がある。共通しているのは池と築山と亭、亭に渡る太鼓橋、極彩色の回廊や絵や彫刻のある二重、三重の高楼と型式が定まっているが、ここの庭園は全く別次元、一隅に竹園があった。倒れかかった竹はそのまま自然に伸びているし、土と落葉と竹の瑞々しさの見事な調和、まるで京都の名園を見る想いで、日中交流の伝統をにじませている様な感じがしてならなかった。

4. 普陀山巡礼

舟山群島の普陀山に渡る。中国仏教四大聖地の一つ、観音信仰の聖地である。船は双胴船、種子島航路のフェリー出島ぐらいいはある。上下とも朝・昼の一日二便。

今朝はあいにくの雨、定刻7時30分出港甬江を下る。破れた帆を大事そうにあげたジャンクが見える。大むかし、この河を下って海に出た人々があつた。荒々しい海からこの河にたどりついた人々もいた。その中に甌州人（種子島人）もいた筈。雨に煙る河面に歴史のドラマが展開して見える。胸が熱くなる。

河口までおよそ一時間、ここから普陀山までおよそ四時間、海に出ると多少揺れ

る、間もなく島影に入り揺れは止まる。錦江湾の中を進む感じ。しかし決定的にちがうのは海の色、黄土色だ。

船内は巡礼者で一パイ。海上には紙銭が舞い、経文の読誦の音が流れる。老婆がデッキに正座して一心に祈っていた。それを取り囲んで眺めている人。ハダシの人を見た、恐らく島民であろう。未だそんな生活もあるのだ。

正午前、種子島に似た感じで島が近付いてきた。二等客は四名、先におろしてくれたが忽ち宿の客引きに取り巻かれて前に進めない。それを振り切って「普濟寺」と書いたバスにかけこんだ。

普陀山について島の案内図に、「普陀山は舟山群島のうちの一小島、面積12.5 km²、最高峰の仏頂山は海拔291m、唐代より中国四大仏山の一つ、著名な普濟、法雨、慧濟三大禪寺があり、大乘梅福、紫竹寺の小庵もある。寺院だけでなく山の緑、海流の白砂奇岩など」自然の景勝地で、気候も温和で有名人の来遊も多く、康有為、孫中山、劉少奇、郭沫若などが遊び、壮麗な山と海の風景、雄大な寺院建築、すばらしい歴史的文物が、ますます内外の遊客をひきつけている」。多少補足を加えると、南北8.6km、東西3.5km、一日もあれば全島がゆっくり歩ける。北緯30度付近にあり気候風土は種子島に酷似している。

息来院飯店に泊まる。一泊90元。ここでも面白いことがあった。寧波飯店のスタッフが普陀山の二つのホテルの名を挙げて「クピー」だと言った。聞きとれないので書いて貰うと「隔壁」と書いた。ホテルのフロントで宿泊の手続きをし、三泊分300元(30元は帰る時に返してくれる、鍵の保証金)を払った。ところが案内されたのは別のホテル、息来小庄賓館の中にある建物だった。「隔壁」とは言い得て妙、微妙な意味があるらしい。

三大寺の巡礼は明日にすることにして中食がてら散歩に出る。普濟寺は隣り、つまり「隔壁」だ。山門の前に大きな「蓮花池」があり真中の亭まで橋で渡る。その東側に石造りの多宝塔が聳え、そこがバスの発着所だ。山門の前を真っ直ぐ進むと小じんまりした門前町、土産物屋や食堂が小さな露地をはさんで密集している。食堂は生きた魚介類をたらいにいれ店先きにおいて客を呼んでいる。さすが島だけあって活魚料理が名菜らしい。大きなカニが2~3元ぐらい。

食堂に入ると。「お茶」と言うのとただの白湯を持ってきた。ホテルでも茶の葉が置いてないので要求すると、「没有」(ありません)。ここではお茶はただの白湯のことらしい。今までも中国人から「お茶をどうぞ」と言われ、白湯を出されたことが何回かある。初めのうちは馬鹿にされた感じがしたが何回か体験しているうちに、習慣の違いで親切心には変わらないことが分ってきた。南京の「侵華日軍南京大屠殺遭難同胞記念館」(この石造りの玄関に300000と大きく彫りこんである)という、恐ろしい記念館を胸が押しつぶされる思いで見終ると守衛さんが、お茶を飲まないかと声をかけてくれた。守衛室で出されたお茶がただの白湯、場所が場所だけに頭が「かつ」となった。今思えば大きな誤解、習慣の違いから生れる誤解は恐いと思つづく思う。

ブラブラ歩いて碼頭まで来て終った。船から見えていた高樓は「南天門」で、これをくぐると如何にも仏法の島に来たという感じがする。すぐ近くに小坊があらざるくとも補修工事中で忙しそうだった。海に潜水艦が見える。そういえばダブダブの水兵服を着た若者を何人も見た。この島は海軍の基地があるようだ。引き返

す。海沿いに民家が点々とある。道下の家を上からのぞいてみると、コの字形に家が建ち庭に井戸があり豚やにわとりが遊んでいる。二階建てでかなり大きい。大家族で住んでいるらしい。屋根にペンペン草が生え軒先に網やウキがぶら下がっている。半農半漁か。周りの畑にはカライモ、サトイモ、大根など、ネギ、キャベツも移植したばかりで種子島の畑をみる様だ。老人が肥桶で人糞をかけていた。遠い記憶にある光景だ。少し回り道して不肯去観音院を訪れる。海辺のきり立った岩の上にある。説明板に「日本僧が五台山（山西省、中国仏教四大聖地の一つ）で修行、帰路ここで船が動かなくなった。持っていた観音像が日本に行くのを嫌がったためという。そこでここに止まり仏法を広めた。普陀山の仏教を開いたのはこの日本僧である」とある。これは先に紹介した案内図の中には書いていない。単なる伝承なのか。兎に角寺名の由来は説明し尽くしている。近くに紫竹林の小庵があり日本から来たというとお堂の観音像の写真をとらせてくれた（どこの寺も仏像の撮影は禁止、どうしても撮りたければ10元あげれば大概は黙認してくれる）。雨が降ったり止んだり。遙かに訪れた普陀山も、目に入る植生を見ている限り種子島を歩いているのと変わらない。

巡礼の日。先ずバスで仏頂山上にかけ上り、そこからあるいて慧濟禪寺、法雨禪寺、大乘院、文物館と回り、午後はたつぷり普濟禪寺で過す計画、午前七時半山頂に上る。車はオンボロ、車内はガラガラ同行者は少ない、馬力が小さいので坂にかかるかと歩いた方が速い。

仏頂山上は何もない。残念ながら雲が多くて遠望がきかない。風が強いので早々に慧濟禪寺に入る。唐代末の創建、観音堂に金ピカの観音像があった。山頂の寺にしては規模が大きい。本堂で頭陀袋に寺印を押印して貰ってお布施が2元。中国人の巡礼者について下山する。「千紋石階」を下る。途中巨石に文字を刻した見せ場が幾つかある。「海王仏国」と刻した巨石は特に人気がある。明代、倭寇に抗戦した明の名将軍侯継高の筆とある。巨石を背景に写真をとる人が多く、私もつられてそばの人からシャッターを押して貰う。「仙水」という湧水もある。線香をあげて拜んでいる。下から上ってくる人も多い。狭い階段を下りる人上る人で一時渋滞もする。

法雨禪寺はひと際壮大で奥ゆきの深いお寺だ。創建は明代、一時火災で消失したが清代に再興され清代建造物の典型だという。客殿で僧団の読経があり耳を傾けている信者も多い。種子島の法華経の読誦に較べると大分間のびした感じ。広大な寺城は樹木が多くそこそこに樹影を作り静かな心に残る寺だ。屋根瓦も壁も寺を囲む土壁も黄土色、その壁に大きな黒い寺号が鮮やかに冴えている。黄土色文化の粋を見る思い。山門の前に池がありここはもう平地、ここから平坦な道が海岸沿いに普濟禪寺まで続き途中に大乘院や文物館がある。大乘庵は小じんまりしたお寺で臥佛が目玉、台湾の巡拝団がガヤガヤにぎやかにお詣りしていた。文物館は閑静見るべき物も余りない。日本から民国初めに贈られたという有田焼きが印象に残る。

下山すると夏日で暑い。ジャンパーを脱いでも汗がびつしより、普濟禪寺はすぐそこだがミニバスに乗る。1時間前に帰り着いた。食堂で中食、ホテルで一服。

午後普濟禪寺に入る。ここも参拝者が溢れ線香の香りと煙りで本堂がかすんで見える。女の巡礼者はそれなりのスタイルがある。頭に派手なタオルを姉さん被りに

し、青色の上衣とズボン、首から黄色の頭陀袋を下げ手にビニールのカバンを持って、ぞろぞろ一団となって歩いている。年配者が多いのでこのスタイルが余計に目立つが、一生に一度の晴れ姿だろうか皆真剣な顔つきでお詣りしている。そこへいくと台湾からの巡拝団は派手な服装で陽気、にぎやかにしゃべりながら歩く。マカオの巡拝団に出会ったが、背の高い若い娘が、極彩色の観音像の入ったガラスケースを胸に抱え、先頭に歩いていった。異様に見えた。

社会主義革命で宗教は弾圧され、文化大革命で否定された。仏教も寺院や仏像等がこわされ経典も破棄された。今は何処のお寺も復興再建に大工で工事中が多い。日本のお寺と似た方法で復興資金の寄付集めをしている所もある。これを支えているのが変わらぬ信仰を持ち続けた信者達であろう。仏教がパミール高原を越え天山南路のシルクロードを東へ進み敦煌、長安(西安)に入り、更に南へ伝播し唐末、宋代にはもうこの島が仏法の島であった。離島が仏法の聖地・聖山に発展していく経緯は、不肯去観音院の日本僧開祖の伝承にも伺えるが、往時、盛時には二百八十の寺と二千人の僧尼がいたという。まさに文字通り仏法の島国であった。

普陀山が仏法の聖地であったことは、江南の海が昔から自由に往来出来る海上の道であったことの証明であろう。ここから東シナ海へ乗り出し、黒潮にのると種子島はもう目前だ。お寺は色々なことを思い出させ、色々なことを考えさせてくれるところだ。

昨日一日休養を取った。今日は普陀山を離れることにする。朝碼頭にいき午後1時出航の二等切符を買う。手ざわりの悪い切符なのでよく見ると日付けが違う。そう言う「没関係」(構わない)と言う。ホントに中国はこんなことには構わない国だ。棧橋に上海行きのスマートな大型客船が着いていた。上海-普陀山航路があることを初めて知った。事前に分つておれば帰りはこの船に乗りたかった、と思った。普陀山巡礼だけであればこの船が便利だ。

時間があるので再び普濟禪寺に入った。昨日と同じ様に善男女で一パイ。お寺はにぎわいの中にも安らぎがある。その安らぎをかき乱されたことがあった。峨眉山(四川省、成都からバスで8時間、四大仏教聖地の1つ)に登った時のことだ。ここには山の入口に「かごかき」がずらっと客待ちしていて一斉に声をかけてくる。断つても断つても何処までもついてくる。特に外国人に対しては執拗、追つても追つてもまとわりつく蠅と同じだ。おかげで仏の聖地にきながら感情を乱されて巡礼どころではなかった。それに較べると普陀山は静かに心ゆくまで仏に出会えるところであった。

帰りの船に乗る。往きと同じ船、顔馴染みになったスタッフがフカフカのソファを指定してくれた。台湾の団体で満席。日本人と分かると皆さんが日本語で話しかけてきた。これが中国に来て初めての日本語の会話、何だかぎこちない。何時の間にか知らないうちに体内で中国化が進行しているような感じだ。

巡礼の途中知り合った寧波市政府幹部の張さんが、大声で見えかくれする島を説明してくれるが、よく言葉が分らない。船内で少しも退屈することなく夕刻寧波着、バスで駅へ、駅から歩いて寧波飯店へ行く。とうとう持参の「甘露」(焼酎)が切れた。冷蔵庫の青島ビールを飲み一人で普陀山旅行の反省会。

(次号へつづく)

熊毛入道について

三浦 安徳

種子島が国として存在していた当時、種子島、屋久島は四郡であった。類聚三大格の天長元年(824)九月三日の条に「能満合熊毛益救合馭謨」とあり、種子島が熊毛郡に、屋久島が馭謨郡になったようである。建仁年間(1201~1204)信基公が種子島に入島した時には、種子島には代官として上妻政直が在島し、上之郡(今の西之表市)を高野入道が、中之郡(中種子町)を野間入道が、下之郡(南種子町)を熊毛入道が、それぞれの郡を郡司として治めていたといわれている。

この三入道のその後がどうなったのかを知る文書が少なく興味を持たれているが、種子島文書(この文書は、懐中島記と同様の考えにたつて記録されたものと思われる)によれば、

◇ 高野入道は、今の高野に罷居候由候、内田備後などの筋にて候哉

◇ 野間入道は石堂にて候

◇ 熊毛入道と申は今の川東八左衛門先祖にて郡庄にて候

とある。

この三入道のうち熊毛入道について、現和上之町榎本貞彦家の伝記に、「先祖は熊毛入道と申す。数代現和の地頭職を勤めていたが、家内残らず磯遊びに行き大波が打ち寄せ断絶した。この時、系図文書旧記等は、どこに仕末したのか紛失してなくなった」と記されている。

ここでは、その遺言伝記を紹介したい。

祖父強兵衛の遺言伝記

私の伯母は九十有余まで長命に御座候。祖父榎本強兵衛の嫡女(むすめ)にて候。祖父老身にて、伯母が申し聞かされ候は、漸々老衰相成、余命計りがたき候間、女ながらも承り、覚居り、申し聞かすべく荒々咄申す儀、段々御座候得共委しい事は覚え申さず、あらまし覚え申すべき分、承知の旨申し聞かされ候。然者、祖父の心意子孫に至り忘却仕段不本に存じ候故、下の通り記し置き候。

◇ 先祖の名字は、熊毛とも名乗申し候。

◇ 家の紋杏夏加を附け来申し候、めうがの紋は、拝領仕る由に申し伝え候。

◇ 現和村の地頭職数代は、私の先祖にて御座候。

◇ 現和村の東に当るせい瀬という大きな平瀬が御座候。其瀬に家内残らず磯遊びにて惣人数三十人余り小舟に乗組み候て、相渡し候ところ覚悟の外大浪が打ち来、人数皆もつて海に打ち落され死申し候。其内に貝太郎という小者(めしつかい)一人瀬にあがり申し候。夫より今に貝太郎瀬と申し伝え候。嫡子熊毛彌九郎と申す者の死跡は、庄司浦の下に寄り申し候。其ところを彌九郎殿死跡と名乗り、今に唱え来申し候。然者、助り申し候は右貝太郎と当主に召し置きの下女、此兩人漸く生き残り申し候。俗にせい瀬、夫より現和村殿瀬と唱う。

◇ 系図文書旧記等これ有由に候得共、右跡のこれに及び断絶申すため不幸にて下人下女の家内にて、一門中も差寄候得共、当惑の砌にて何偏何方に片付け申し候

- も沙汰いたさず紛失の由に御座候。
- ◇ 先祖数代の地頭は、假屋地吉平上之園と申すところ、二反斗の屋敷畠にて候。其内に先祖墓所御座候故、今に仁敬仕候。
 - ◇ 嫡家は、右仕合相成、次男屋仁古、三男家は西俣と今は居り候処、嫡家は断絶に及び候に付き、屋仁古家嫡より本家の跡を継ぎ申し候。其の子孫、私にて屋仁古分筋目（家柄）、今の吉平庄兵衛、榎本権七同苗長右エ門にて候。西俣分れ子孫に実子無く御座候に付き、日高氏を養子に仕為事に候。
 - ◇ 曾祖父榎本新左エ門の代、現和村より安納村に移り申し居住仕り候ところ身代差迫り、飢寒に及び申す程にて、これ憂悲々々躰なるに御座候。然るところに屋仁古家子孫吉平越右エ門の父榎本新左エ門より言上奉り候。強兵衛事榎本氏の本家嫡流筋の者に御座候得共、逼迫仕り有耶無耶の躰にて御座候間、宣召仕下され度旨、訴え奉り夫より現和村に移り御奉公方に付きも御氣を附けられ下さるなり候も御座候て、漸々身代にも取立て御奉公相勤め申し候。其後、久時公（御家十八代）御下島遊ばされ、諸人士筋目（家柄）立身、御免願ひ奉りの砌に御座候。依つて、榎本吉兵衛より強兵衛に申し候は、此節立身願ひ奉り度候。本家より申し上げ候様申す候に付き、強兵衛弟喜之助と申す者早世仕り跡断絶仕り申し候。此跡に立身願ひ奉り御免蒙り候。右子共榎本吉左エ門、榎本珠左エ門にて御座候。
 - ◇ 榎本八郎左エ門、榎本兵右エ門、榎本八郎兵衛、榎本甚兵衛より強兵衛に相付き立身願出申し候故、訴え奉り候ところ右祖父六左エ門は、肥後氏の小者に候得ば、御免遊ばされ難き由に仰せ渡され、是非なく罷り居り申し候得共、右の衆又は強兵衛に申し候。自他共零落浮沈は世の習にて候、元来、士筋目の子孫に生れ、この躰にては残念至極に御座候由、悔申候に付き是又家の支流の者共別条なく候得ば申す処も尤に存じ強兵衛最早行年八十四、五歳に罷り成り歩行も叶い難き故、馬に乗り右の衆を召列上り罷り委細に訴え奉り候得ば、願ひ筋に立身御免蒙り安堵仕なり事に候。
 - ◇ 西町の宿右エ門、強兵衛に心安き者に御座候ところ名字を持ち申さず、他国に於ても西町の宿右エ門と名乗り申し候。何共、残念に御座候間榎本名字を名乗らせ候様に、願ひに拠るも無く申し候に付き免し差し、弟直右エ門、早右エ門、右親類迄も免許致し候。夫に付き、勤方の節は、元来士筋目榎本家の上座は相成らず筈に御座候間、末孫迄も承り置くべき由に候。
 - ◇ 日承上人御筆永禄三庚午申九月吉日種子島大楠にこれを授与と御座候。御守一幅御先祖縁より、先祖代々拝領仕る由、申し伝え大切に格護仕り来申し候。
 - ◇ 先祖の事、熊毛入道と申し伝え候、年間・時代・来歴を知らず。右祖父の遺言の次第、亡父並びに私に至り口達にて承伝のため申迄にて後、子孫に唱失に相成るを滞むべく申す哉と頃日氣附け書き記置き候。勢々龜末格護これ有間敷候。万一紛失致し候ては、先祖に対し、第一不幸の罪、大成る事候。依つて如件。

榎本権右エ門貞則

アカホヤ火山灰の研究史

成尾英仁 (鹿児島玉龍高等学校)
奥野 充 (西之表市立国上中学校)

I はじめに

アカホヤ火山灰 (K-Ah; 町田・新井, 1978) は, 約6,300年前に鬼界カルデラから噴出した広域テフラである (図1)。

町田・新井 (1976) のAT火山灰の発見以来, 日本全域を覆うような広域テフラが次々と報告され, 考古学にも大きな影響を与えている。近年, これらの広域テフラを用いた学際的な研究もさかんに行なわれており, 多くの成果をあげている。しかし, 他分野のデータを引用する際には, 研究史などその分野の学問的背景の理解が必要不可欠である。

本稿では, 主として火山学的研究成果に基づいてアカホヤ火山灰を形成した噴火の推移などを紹介し, このテフラの研究史を火山学, 考古学などさまざまな観点からまとめることを試みる。

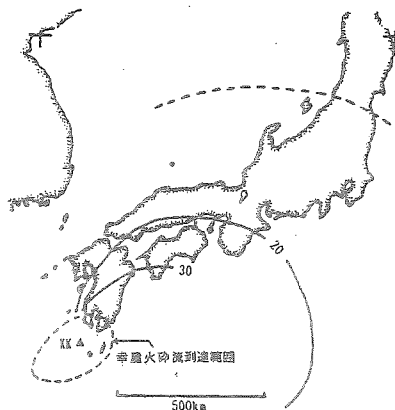


図1 アカホヤ火山灰 (K-Ah) の等層厚線図 [cm] (町田・新井, 1983 による)
KK: 鬼界カルデラ

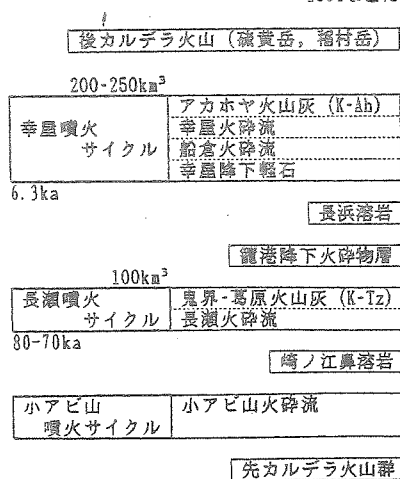
II アカホヤを形成した噴火

鬼界カルデラの地質層序を表1に示す。鬼界カルデラでは, 第四紀後期に3回の大規模な火砕流噴火が認められている (小野ほか, 1982など)。

アカホヤ火山灰は, このうちの幸屋噴火サイクルの幸屋 (竹島) 火砕流から分離した co-ignimbrite ash であると考えられている (町田・新井, 1978)。

本稿において, 幸屋噴火サイクルにより形成された一連のテフラ (表3) に対して “アカホヤ” の名称を用いる¹⁾。

1 鬼界カルデラの地質 (ブロック・ダイアグラム) (小野ほか, 1982; Kobayashi and Hayakawa, 1984などによる)



1) 火山活動の休止期を示す腐植層などによって上下を限定された, 比較的短期間に起こった一連の噴火活動によってもたらされた火砕堆積物とするテフラ層 (tephra formation) の定義 (早川, 1983) に相当する。

1. 発生時期

アカホヤを形成した噴火の発生時期については、① ^{14}C 年代測定 ② 考古遺物による推定 ③ 沖積層との対比による推定がなされている。とくに鹿児島県本土の大隅・薩摩両半島の南部では、アカホヤ中に多くの炭化木片が入っており、それから得られた ^{14}C 年代は表2のようである。これより、この噴火の発生時期は約6,300年前と推定され、これは考古遺物から推定される年代ともほぼ整合的である。

表2 アカホヤの ^{14}C 年代 (町田・新井, 1978を一部抜粋)

堆積物	採取場所	年代値 (年前)	試料	文献
大浦火砕流	硫黄島	5,590±170	木炭	金原ほか (1977)
幸屋火砕流	佐多町昌栄	6,050±110	木炭	宇井・福山 (1972)
幸屋火砕流	佐多町大中尾	6,290±120	木炭	宇井・福山 (1972)
幸屋火砕流	指宿市下門	6,400±110	木炭	宇井 (1967)
アカホヤ	鹿屋市笠野原	4,640±80	腐植土	宇井 (1966)
"	"	5,450±160	腐植土	Amine・Miyouchi (1965)
"	"	6,360±90	腐植土	松井 (1966)

2. 噴火推移の概略

アカホヤを形成した幸屋噴火サイクルの推移は、およそ次のように考えられている (表3; 宇井, 1973; 町田・新井, 1978; 小野ほか, 1982; Nagaoka, 1988 など)。

表3 幸屋噴火サイクルで噴出したテフラの名称と層位関係

鬼界カルデラ		南九州	九州以遠の
硫黄島	竹島	大隅半島	諸地域
アカホヤ火山灰 (K-Ah)			
大浦火砕流	竹島火砕流	幸屋火砕流	
堆積物	堆積物	堆積物	
	船倉火砕流		
	堆積物		
	船倉降下軽石	幸屋降下軽石	

噴火は現在の三島村硫黄

島・竹島付近の鬼界カルデラで発生したが、まず数回にわたってプリニアン噴火がおり、幸屋降下軽石が堆積した (図2)。大隅半島南部の佐多町付近では約50cm、竹島では約2.5mの厚さである。大隅半島南部では大豆大〜ウズラ卵大で、角張った繊維状をしている。

降下軽石の噴出に引き続いて、大規模な火砕流の流出があった。この火砕流は船倉火砕流堆積物と呼ばれ、熱のため火山ガラスが溶け、黒灰色をした溶結凝灰岩にかわっている。周囲が海のため分布範囲は正確にわからないが、噴出源から20~30kmまでは到達したと推定される (町田・新井, 1978)。

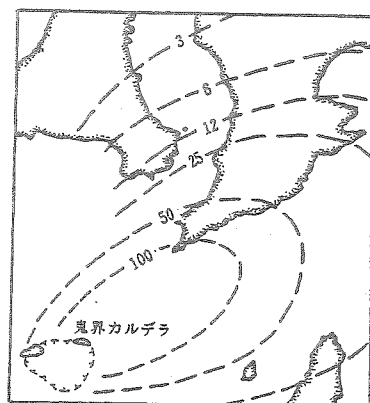


図2 幸屋降下軽石の等層厚線図 [cm] (Walker et al., 1983 による)

その後、一連の噴火の中で最大規模の破局的噴火が発生した。噴火は浅海底で発生したと推定されるが、軽石・岩片・火山灰の混じった巨大な噴煙柱がつくられ、その下部が崩れ高温・高速の火砕流となって種子・屋久地方、薩摩・大隅半島両地域を襲った (図1)。この火砕流は幸屋火砕流堆積物と呼ばれるが、屋久島の標高2,000m近い宮之浦岳頂上付近でも認められ、さらに薩摩半島中部の千貫平にも堆積

しており、高速で山を駆け登ったと考えられる。また、海を越えてきたにもかかわらず高温であり、内部に多量の炭化木片が入っている。この火砕流はきわめて薄く拡がり堆積した特徴を持っている（宇井，1973；Low-aspect ratio ignimbrite）。

ところで、幸屋火砕流の噴煙柱は成層圏まで達したと推定されているが、噴煙柱は軽い火山ガラスを主体とする噴出物からできており、それが降下し火砕流堆積物の上に堆積した。この火山灰はアカホヤ火山灰と呼ばれ、入戸火砕流堆積物に伴うAT火山灰同様のco-ignimbrite ashであると考えられる。南九州ではその厚さは約30cmであり、最下部に大豆大の軽石と火山豆石が薄く堆積している。南九州より遠方になると徐々に薄くなるが、関東地方や北陸地方、さらに伊豆大島や近海の海底で確認されている（町田・新井，1978；神嶋ほか，1989；一色・松村，1976；小田ほか，1983；杉原ほか，1983；町田・新井，1988など）。

ところでこれらの噴出物は、薩摩・大隅半島南部では黄白色～白色を帯びているが、それより北方および南方では特徴的なオレンジ色を帯び、アカホヤの語源となっている。

3. 種子島でのアカホヤ

種子島ではアカホヤは第四紀テフラの最上位にあるため削剝などを受け、大隅半島南部などと比べると非常に保存が悪いが、黒ボク土の発達したところでは比較的良好である。

南種子町野大野A遺跡は、縄文時代後期後半に位置付けられる一湊式土器の単純遺跡である（南種子町教育委員会，1991）。ここでは黒ボク土の発達がよく、アカホヤの保存状態も比較的良好である（図3）。アカホヤのメンバーのうち幸屋降下軽石、幸屋火砕流堆積物、アカホヤ火山灰が認められ、同遺跡の発掘報告書の第3図のVa層、Vb層がそれぞれアカホヤ火山灰、幸屋火砕流に相当する。また、幸屋降下軽石は厚さが4cmほどである。この降下軽石は南部では薄い、北部では、約20cmの厚さである（図2）。

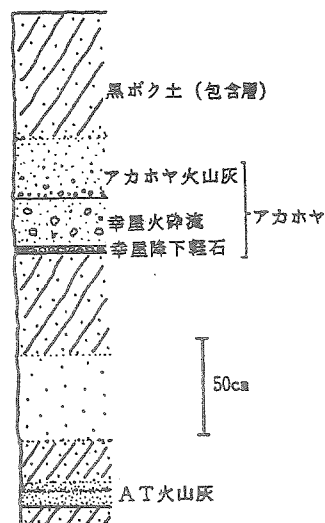


図3 南種子町野大野での柱状図

III 研究史

アカホヤの研究史を表4にまとめて示す。Matumoto (1943) は鬼界カルデラを九州の4大カルデラとし、その形成に関係する大規模火砕流を記載した。

アカホヤは表層近くにあり、しかも農業生産性の低い土壌であるため古くから注目され、火山学のみならず土壌学の分野からも研究が進められた。菅野・本荘ほか（1955）や菅野・中島ほか（1955）はアカホヤについて初期の研究（層厚分布による噴出源の推定など）を行った。アカホヤを火山噴出物と認め、分布や特性などを精力的に調査したのは資源研究所のメンバーで、桑野ほか（1959）、松井（1960）、郷原・小森（1961）、松井・和島（1961）、郷原（1963）などの成果となって表れた。その後、成瀬（1966）、松井（1966）、田村（1969）、中村（1971）などの研究がある。これら一連の研究により、アカホヤがきわめて広域に分布すること、アカホヤが桜島起源の北部アカホヤと、トカラ列島北部の火山に由来する南部アカホ

ヤに分かれるとした。また、いずれの研究も、アカホヤを降下火山灰としている。

噴出源について1970年代初期までは、①多起源説、②単一起源説の2つの考えがあった。多起源説はアカホヤの分布がきわめて広く、単一の火山の噴出物とするにはボリュームが大きいこと、池田、桜島、霧島などの火山に近づくにつれ厚くなることから生まれ

表4 アカホヤに関する主な研究

文 献	主な研究内容 (噴出物識別など)	噴 出 源
Matumoto (1943)	鬼界カルデラの記載	
管野ほか (1955)	降下火砕物	霧島, 硫黄島など
桑野ほか (1959) など 資源研究所 (1960代)	南九州のアカホヤの層厚分布など	
松井 (1967)	降下火砕物	トカラ列島
田村 (1969)	降下火砕物	鬼界, 池田, 霧島
中村 (1971)	降下火砕物	鹿児島湾入口
宇井 (1973)	降下火砕物・火砕流堆積物	鹿児島湾入口
小野・曾屋 (1975)	鬼界カルデラの地質調査	
石原 (1977)	鬼界カルデラの重力測定	
長友ほか (1977)	強磁性鉱物による対比	鬼界カルデラ
町田・新井 (1978)	降下火砕物・火砕流堆積物 co-ignimbrite ash	鬼界カルデラ
新東 (1978)	アカホヤによる土器の形式区分	
Walker and Ui (1984)	Low aspect ignimbrite の噴火・ 流動機構の火山地質学的研究	
成尾 (1988)	奄美諸島におけるアカホヤの発見	

たと。とくに田村 (1969) は噴出源として鬼界カルデラ、池田火山、霧島の3つをあげた。単一起源説は松井 (1966) のトカラ列島説、中村 (1971) の鹿児島湾入口付近海底説などである。

アカホヤについての画期的研究は宇井 (1973) によってなされ、アカホヤが stage I の降下軽石、stage II・III の火砕流堆積物、stage IV の降下火山灰層からなることを明らかにした。さらに火砕流は著しく低密度できわめて薄く拡がり堆積したことを示し、模式地にちなんで幸屋火砕流と命名した。アカホヤの噴出源については、鹿児島湾入口と推定した。つづいて、小野・曾屋 (1975) は鬼界カルデラの地質調査を実施し、カルデラ形成期の噴火を 2A・2B・2C の3期に区分した。2B は船倉降下軽石と船倉火砕流の噴出であり、2C は竹島火砕流と大浦火砕流の噴出である (表3)。船倉降下軽石は火砕流の噴出に先立つプリニアン噴火の産物で、宇井 (1973) の stage I (幸屋降下軽石) に対比される。また、船倉火砕流は火山ガラスレンズの発達した黒色の溶結凝灰岩であり、竹島火砕流と大浦火砕流は同一層準で宇井 (1973) の stage II・III (幸屋火砕流) に対比されると考えられる。

石原 (1977) は鬼界カルデラ周辺での重力測定を行い、この付近一帯が -25mgal に及ぶ低重力異常地帯であることを示し、その質量欠損が 7.9×10^{10} ton に達することを明らかにした。

長友ほか (1976, 1977)、長友・庄子 (1977) は、強磁性鉱物を利用してアカホヤの対比を行い、その結果、アカホヤは単一の噴出物であり、鬼界カルデラがその起源であることを明らかにした。町田・新井 (1978) は、アカホヤ火山灰についての総括的研究を行い、西日本の広い範囲で認められるアカホヤ火山灰が鬼界カルデラ起源であることを示し、それが大規模火砕流に伴う co-ignimbrite ash であることを明らかにした。降下軽石から火砕流の発生、火山灰の形成にいたる一連の噴火過程を復元し、それにより現在の鬼界カルデラが形成されたことを明らかにした。

また、アカホヤ火山灰の地形学・考古学的重要性を指摘した。

Walker and Uii et al. (1984) は、幸屋火砕流を対象として火山地質学的な研究手段により Low-aspect ratio ignimbrite の噴火・流動機構を考察している。

アカホヤの考古学上の重要性については、新東 (1978) , 町田・新井 (1983) などが指摘している。新東 (1978) はアカホヤを利用することにより、それまで縄文時代早期の古い段階の土器と位置づけられていた轟式土器が、アカホヤよりも新しい時期のものであることを明らかにし、アカホヤ直前の塞ノ神式土器文化が急速に衰退する原因をアカホヤ噴火の影響ととらえた。また、成尾 (1988) は奄美大島北部でアカホヤを発見し、その上位から爪形文土器が出土することから琉球列島の爪形文土器が新しい可能性を示した。

IV まとめ

アカホヤについて、これまでの研究により明らかにされた結果を要約すれば次のようである。

1. アカホヤは降下軽石、火砕流、降下火山灰からなり、火砕流に伴う降下火山灰は関東平野、朝鮮半島、奄美大島付近まで降下堆積した。
2. 火砕流堆積物は著しく低密度できわめて薄く拡がり堆積した (Low aspect ratio ignimbrite) 。
3. 噴出源は硫黄島、竹島付近の鬼界カルデラである。
4. 噴出年代は約6,300年前 (縄文時代早期末) であり、南九州では塞ノ神式土器文化の時期に相当する。

アカホヤは農業生産上ほとんど役に立たない厄介者として扱われてきたが、火山学や考古学、地形学などにとっては重要なテフラである。アカホヤを形成した噴火はわが国における完新世最大の噴火であり、その噴火機構を明らかにすることは、今後の噴火災害を予測する上でもきわめて重要である。また、考古学的には広域におよぶ鍵層としての役割があり、各地の遺物の上下関係の把握や対比、また火山災害の影響評価に利用することができる。とくにアカホヤの噴火災害についてはまだ研究が始まったばかりであり、今後、文化内容の変遷や植生に与える影響、地形の変化など詳細に調査・検討する必要がある。

V 文献

- Aomine, S. and Miyauchi, N. (1965) Imogolite of Imogo-layers in Kyushu. Soil Sci. Plant Nutr., 11, 212-219.
- 郷原保真 (1963) 九州地方の Tephrochronology. 第四紀研究, 3, 123-138.
- 郷原保真・小森長生 (1961) 鹿児島県大隅半島の第四紀層。資源研究所彙報, 54-55, 176-190.
- 早川由紀夫 (1983) 十和田火山中振テフラ層の分布、粒度組成、年代。火山, 28, 263-273.
- 石原丈実 (1977) 鬼界カルデラの重力異常。地質調査所月報, 28, 575-588.
- 神嶋利夫・西田史朗・宇津川徹 (1989) 富山県に分布する広域火山灰—主にDKPとATについて—。富山県地学地理学研究論集, 9, 23-34.
- 菅野一郎・本荘吉男・有村玄洋・徳留昭一 (1955) 日本火山灰土に関する研究 (第

- 8報) 熊本県人吉盆地の音地型(ガラス質火山灰土)について。九州農試彙報, 3, 31-58.
- 管野一郎・中島治己・有村玄洋・有留昭一(1955) 日本火山灰土に関する研究(第9報) 種子島の音地型(ガラス質火山灰土)について。九州農試彙報, 3, 155-172.
- 金原啓司・茂野 博・小野晃司(1977) 鹿児島県薩摩硫黄島(鬼界カルデラ)大浦火砕流の14C年代。地質調査所月報, 28, 763-765.
- Kobayashi, T. and Hayakawa, Y. (1984) Geology of Kikai caldera (Source of the Koya Ignimbrite), Japan. In Walker, G. P. L. and Ui, T. (ed.) "A Progress Report of U.S.-Japan Cooperative Science Program-Volcanology of the Koya Ash Flow", 13-14.
- 桑野幸夫・郷原保真・松井 健(1959) 大隅半島の地質(予報)。資源研究所彙報, 49, 59-82.
- 町田 洋・新井房夫(1976) 広域に分布する火山灰-始良T_n火山灰の発見とその意義-。科学, 46, 339-347.
- 町田 洋・新井房夫(1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ-アカホヤ火山灰。第四紀研究, 17, 143-163.
- 町田 洋・新井房夫(1983) 広域テフラと考古学。第四紀研究, 22, 133-148.
- 町田 洋・新井房夫(1988) 日本列島周辺の深海底に分布するテフラ。第四紀研究, 26, 227-242.
- Matumoto, T. (1943) The four gigantic caldera volcanoes of Kyushu. Jap. Geol. Geogr., 19, special number, 57p.
- 松井 健(1960) 大隅半島の埋没性火山灰土壌の類別・分布および起源について。資源研究所彙報, 52-53, 115-126.
- 松井 健(1966) 大隅半島笠野原台地の“アカホヤ”層の噴出年代。地球科学, 87, 37-39.
- 松井 健・和島誠一(1961) 大隅半島の埋没性火山灰土壌の類別・分布および起源について(追補および総括)。資源研究所彙報, 54-55, 161-175.
- 南種子町教育委員会(1991) 野大野A遺跡・上瀬田遺跡。南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(3), 53p.
- 長友由隆・庄子貞雄・小林進介(1976) 南九州のアカホヤの堆積状態と強磁性鉱物の化学組成について, アカホヤの土壌肥料学的研究(第1報)。日土肥誌, 47, 342-348.
- 長友由隆・庄子貞雄(1977) アカホヤ, イモゴ, オンヂの対比ならびに噴出源について, アカホヤの土壌肥料学的研究(第2報)。日土肥誌, 48, 1-7.
- 長友由隆・庄子貞雄・玉井 理(1977) アカホヤの一次鉱物組成と岩質について, アカホヤの土壌肥料学的研究(第3報)。日土肥誌, 48, 218-222.
- 中村真人(1971) 開聞岳火山の岩石学的研究。地質学雑誌, 77, 359-364.
- 成尾英仁(1988) 奄美諸島における始良・鬼界カルデラ起源の広域火山灰(演旨)。火山, 33, 248.
- 成瀬 洋(1966) 霧島火山東方の第四紀 Tephra。資源研究所彙報, 66, 15-33.
- 小田静夫・杉原重夫・丑野 毅(1983) 伊豆大島における縄文時代の遺跡・遺物と

- 鬼界-アカホヤ火山灰(演旨)。日本第四紀学会講演要旨集, 13, 57-58.
- 小野晃司・曾屋龍典(1975) 鬼界カルデラ, 竹島・硫黄島の地質(予報)。火山, 20, 185-186.
- 小野晃司・曾屋龍典・細野武男(1982) 薩摩硫黄島地域の地質。地域地質研究報告書(5万分の1図幅), 地質調査所, 80p.
- 新東晃一(1978) 南九州の火山灰と土器形式。どるめん, 19, 40-54.
- 杉原重夫・小田静夫・丑野毅(1983) 伊豆大島の鬼界-アカホヤ火山灰と縄文時代の遺跡・遺物。考古学ジャーナル, 224, 4-9.
- 田村昇市(1969) 九州における橙黄色ごくガラス質火山灰(アカホヤ)の分布と類別, 命名。日土肥誌, 40, 265-270.
- 宇井忠英(1967) 鹿児島県指宿地方の地質。地質学雑誌, 73, 477-490.
- 宇井忠英(1973) 幸屋火砕流-極めて薄く拡がり堆積した火砕流の発見。火山, 18, 153-168.
- 宇井忠英・福山博之(1972) 幸屋火砕流堆積物の14C年代と南九州諸火山の活動期間。地質学雑誌, 78, 631-632.
- Walker, G. P. L., McBroome, L. A. and Caress, M. E. (1984) Product of Koya eruption from Kikai caldera, Japan. In Walker, G. P. L. and Ui, T. (ed.) "A Progress Report of U.S.-Japan Cooperative Science Program-Volcanology of the Koya Ash Flow", 4-8.
- Walker, G. P. L. and Ui, T. ed. (1984) "A Progress Report of U.S.-Japan Cooperative Science Program-Volcanology of the Koya Ash Flow", 27p.

今平一号墳に関する反省

種子島考古学研究会長 上妻紀夫

1. 巨石群の調査の遅れ

鹿児島県立種子島実業高校の農場内の巨石群の調査の遅れは、学校に多大の影響を与えた。現在校の前身、種子島農林学校は、市内城地区に設置されていたが、年とともに発展していく当校の校地面積があまりにも狭あいであったため、昭和12年(1939)に現在地へ移転した。移転した当時より、次のような事例があったのか?不明であるが、昭和16年前後より、上記巨石群のある場所において、不浄なことをすると「たたり」があるから慎むべしと先生の注意があった。しかし、はっきりした理由の説明は、なかったようである。学校側は、この古墳問題で農場整備近代化運営また生徒の指導についても、不都合の多かったことは、事実である。それから、なすすべも無く、30数年も経過した。

これは、学校側にとっても、調査研究する側にとっても、大変な損失であった。「善は、急げ」の古いことわざは、尊重すべきである。

2. 学術的調査報告

昭和27年(1952)8月、三友国五郎・川口貞徳・国分直一先生らの調査による西之表町新城出口遺跡とは、県立種子島農業高等学校敷地内にある縄文および弥生遺跡を指しているが、同校正門付近には、遺物包含層が当時露呈していた。縄文土器の塞ノ神式土器である。

また、同校裏側の農場に隣接した地域には「やや環状に位置する自然石の巨石群が二ヶ所に見られ、その付近に隣接して古墳の石室構造の遺構でないかと思われる巨石群が発見された」と昭和28年(1953)5月考古学雑誌第39巻第1号に発表された。

3. 発掘予算まなならず

文化財関係者、考古学研究会員の皆さんの古墳であって欲しいという強い念願も、当局に通ぜずにいたが、30数年後の平成元年(1989)によようやく予算がつき発掘されることになった。

発掘担当者は、鹿児島県歴史資料センター黎明館主査池畑耕一先生、発掘調査は、平成元年9月11日から17日までの一週間であった。池畑先生も、古墳であって欲しいと念願しつつ発掘調査をされたと思うが、次の報告の言葉となってしまった。

「学問の世界は、非情である。調査結果は、残念ながら、古墳であることを否定した。」しかし、「今回の調査は、文化財保護の面から大きな意義を持っている。こうした時世にこうしたかたちで純粋な発掘調査が地方自治体の手で行われたことは高く評価されると思う。」

4. 文化財関係の予算について

島内一市二町の文化財関係の協議会が、年一回開催されているが、毎年重要問題

として取り上げられるのが、文化財関係の予算の問題である。(種子島・屋久島合同会の場合も同様である。) いずれも悩むだけで向上の実績が上がっていないのが実状である。市、町当局の文化財保護の重要性の認識の向上を要請するほかない状態である。

しかし、西之表市においては、近年好成绩である。有り難く感謝の意を表している。

- (1) 昭和63年8月16日～同月21日 形之山化石群第一次発掘調査
- (2) 平成元年8月16日～同月21日 形之山化石群第二次発掘調査
- (3) 平成元年9月11日～同月17日 今平一号墳発掘調査

5. 今後の課題

- ① 種子島において、古墳調査は、今回がはじめてのことであった。これにくじけることなく学者の方々のご指導を仰ぎ、地元のわれわれが互いに研究しあつて古代の研究に第二步を力強く踏み出すべきでないか。
- ② 国分寺(島分寺)の件がある。この存在は、文献に明記されていることであるので、わたくしたちの責任において追跡研究の第一歩を踏み出すべき問題と考える。

具対策も発表せず、無責任の責を負うことになると思いますが、若年の研究家を信頼して提案した次第である。

終わりに一言お礼を申し上げます。「潮流」をご愛読くださっている皆様のご愛顧によって、どうかかよちよち歩きで生命を保っています。いつも難産気味で気をもんでいます。幼児を育てる気持ちで玉稿を賜りますれば幸甚の至りに存じます。よろしくお願い申し上げます。

わたしは、この会の産婆さんのお湯わかしの役をつとめています。お湯わかしが間に合わないこともあります。鞭をください。

民俗資料による出土する石錘の検討Ⅱ

鮫島 安豊

前号で種子島のそれぞれの地域における民俗資料に見る石錘の製作状況や使用状況について報告したが、今号では、一応のまとめとしてみたい。

1. 石錘の分布

種子島の全地域で、戦前まで使用されていたようである。鉛の普及とともに姿を消した。「〇〇地域の石錘（イワと呼ぶ）は、良い。」といわれるように、原材料は、他地域から運ばれているケースもある。

2. 石質

石質は、硬砂岩と軟砂岩に大別されるが、軟砂岩は、溝を巡らしたり、打欠するのに作業がしやすい利点があるが、割れ易いという欠点がある。硬砂岩を打欠して製作している石錘は、稀である。硬砂岩、重量があり、かつ長形のものが選ばれており、その形状が重要となってくる。

3. 石錘の形状

石錘は、根石と呼ばれる網の両端に取り付け、全体を水底に沈め定置するためのものと根石の間にいくつもの小形の錘を取り付けて網全体を定置させる用途のもの2通りがある。

根石は、網を潮から守るための最も大切なものであるが、魚網の形状によって大きさや重量が違ってくるが、一般的に大人が一人で持てるほどの20~30kgのものが多く、通常、イワイシと呼ぶものは、この種のものでなく、この根石と根石の間に取り付けられる小形のものをさしている。500g~3kgと網の用途によってまちまちである。尚、長形のイワイシは、形状からしてロープがはずれにくいことから、打欠したものは、少ない。それは、潮流の速い地域と遅い地域、波の荒い地域と穏やかな地域で打欠が必要かどうかで決定される。種子島の東シナ海に面する地域は、太平洋側より比較的穏やかな地域であり、そのことより根石以外は、打欠することが少ない。それに比較して、国上湊や沖ヶ浜田等の太平洋側では、自然石のものは少なく、必ず打欠している。特に、国上湊地域は、種子島の最北端に位置し、好漁場であると同時に海の荒い地域である。ここで採取される石錘は、長軸、短軸ともに一周する根石が多いことも注目し値する。

さらに、これら民俗資料にみる石錘を観察してみると、石錘の製作段階で、石の側面でロープが切れないように、必ず製作段階で打欠面の調整が行われていることがわかった。

4. 表採による石錘との比較とまとめ

出土する石錘の重量は、一般的には、表1に示すとおり、200g台が多い。しかし、中には、600gおよび900gを示す大形のものも出土例が報告されている。

資料1は、国上太田赤木嵐で表面採取された石錘である。赤木嵐は、縄文後期市来式土器を散布する遺跡で、これまで数多くの資料を表採している（国上太田在住の長野清市氏）。

表1 出土する石錘の重量

200g台	300g台	400g台	500g台	600g台	900g台
7個	4個	2個	2個	1個	1個

重量は、500gとほぼ中程度で、長、短軸をほぼ一周する有溝の石錘であるが、民俗例に見る石錘とは、重量が比較にならないほど軽く、根石とみるにも、あまりにも軽量すぎる。更に、これらの有溝の石錘は、縄文後期の遺跡から出土することが多いことも特筆すべきことである。

資料2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 10. 11. は、弥生遺跡で表採されたものであり、比較的扁平な側面のみを打欠し、重量も300~600gである。資料12. 13. は、短軸側を打欠し、長軸方向に打痕跡が溝状に走っている。石錘とたたき石とを共用したかにも考えられるし、また、あくまでも長軸の曲面のみを打痕することで石錘として使用したとも考えられる。

民俗例や資料1.などは、長、短軸を正確に刻溝されており、資料14. 15. は、斜めに打痕跡が走っている。資料14. は、3ヶ所の凹部がある。資料16. において、石錘と凹石（たたき石）が共用されたと思われるもの。資料17. は、研磨痕があり、すり石の共用であろうか。

民俗資料にみる石錘の重量を計測すると、表2に示すとおりである。

表2 民俗資料にみる石錘の重量

1kg	1~2kg	2kg	2~3kg	3kg	4kg	5.5kg	6kg	7kg	14kg	21kg
2個	15個	10個	5個	3個	1個	2個	1個	1個	1個	1個

(1~1.5kg ウツボ籠の根石) (1kg~2.5kg イセエビ網の根石)
 (1kg~3kg キピナゴのイワイシ) (4kg 潮帆の錘) (6kg 丸木舟のイカリ)
 (7kg 一本釣り用の錘) (14~21kg 大網の根石)

上記の民俗例からは1kg未満の石錘は、実見できなかった。何故、出土する石錘は、1kg未満が主体であるのに対して、民俗例において発見できないのか？網の構造上の相違からであろうか？調査不足なのかも知れない。

ここで、特別な例として、西之表市小浜で実見した民俗例による錘を紹介してみたい。小浜在住の杉氏は、奄美大島与論から移住した方で、この網も与論の漁法によるものである。与論は、奄美大島の最南端に位置するサンゴ礁地帯で追い込み漁を主体とする漁法である。杉氏の使用している錘は、この追い込み漁に使用しているもので、極めて軽量小形で、小さい魚を追い込み漁するためのものである。石質は、硬砂岩で15gを計る。硬砂岩を小刀で傷つけて製作してある。魚種は、オオメと呼ばれる小魚である。魚網の繊維は、緒でこの15gの錘を両端にとりつける。このイワイシは、オオメ網の根石である。この錘の間には、タカラ貝等の貝錘をとりつけてある。この追い込み漁の軽量の錘は、すでに化学繊維に変わっていた。

【まとめ】

今から、15年前、西之表市周辺の漁村調査において、上述の民俗例の石錘調査を行ったが、その際のフィールドノートを整理してみた。しかし、今日、その製作方法等を知る古老は、すでに亡く、より正確に記録できなかつたことは、誠に残念である。

網の構造と石錘との関係が最も重要であるのだが、それをまとめるまでには、至らなかつた。魚網の生命線である根石は、極めて重量があり、更に必ず長軸、短軸ともに周溝するものになっている。根石と根石の間の石錘は、海の荒い地域とそうでない地域によって打欠したり、自然石を利用する場合にわけられていること。

弥生式土器を散布する遺跡で表採される石錘は、形状が扁平で短軸のみを打欠し、重さも軽量であること。縄文式土器を散布する遺跡から表採される石錘（今回は1件のみ例示）の特徴は、長、短軸ともに周溝する有溝の石錘で900g台の重量であること。

民俗例では、1kg以上が主体であるが、この場合魚網が藁網であること、その他に草木（イサキ、コウゾ、ミツマタ）等の繊維があつたのだが、石錘との関係を明確にすることができなかつた。今後の課題としていきたい。

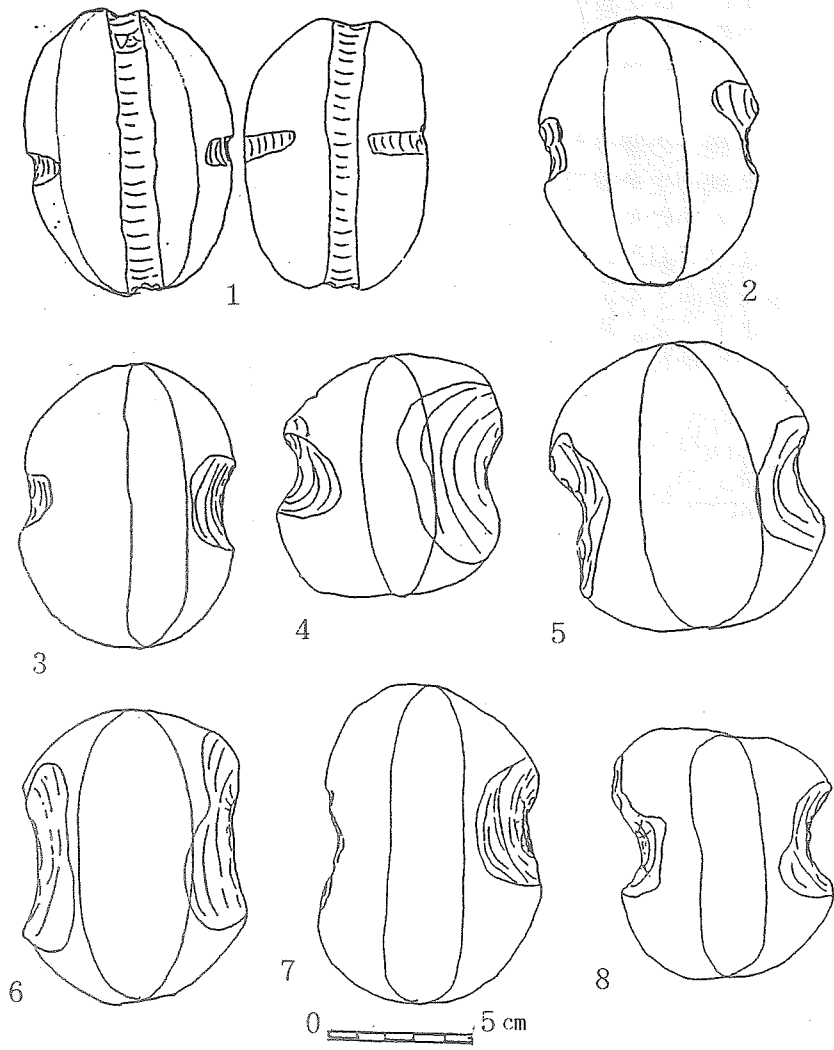


Fig. 1 表面採取の石錘 (1 国上太田 .2~8 現和泉原)

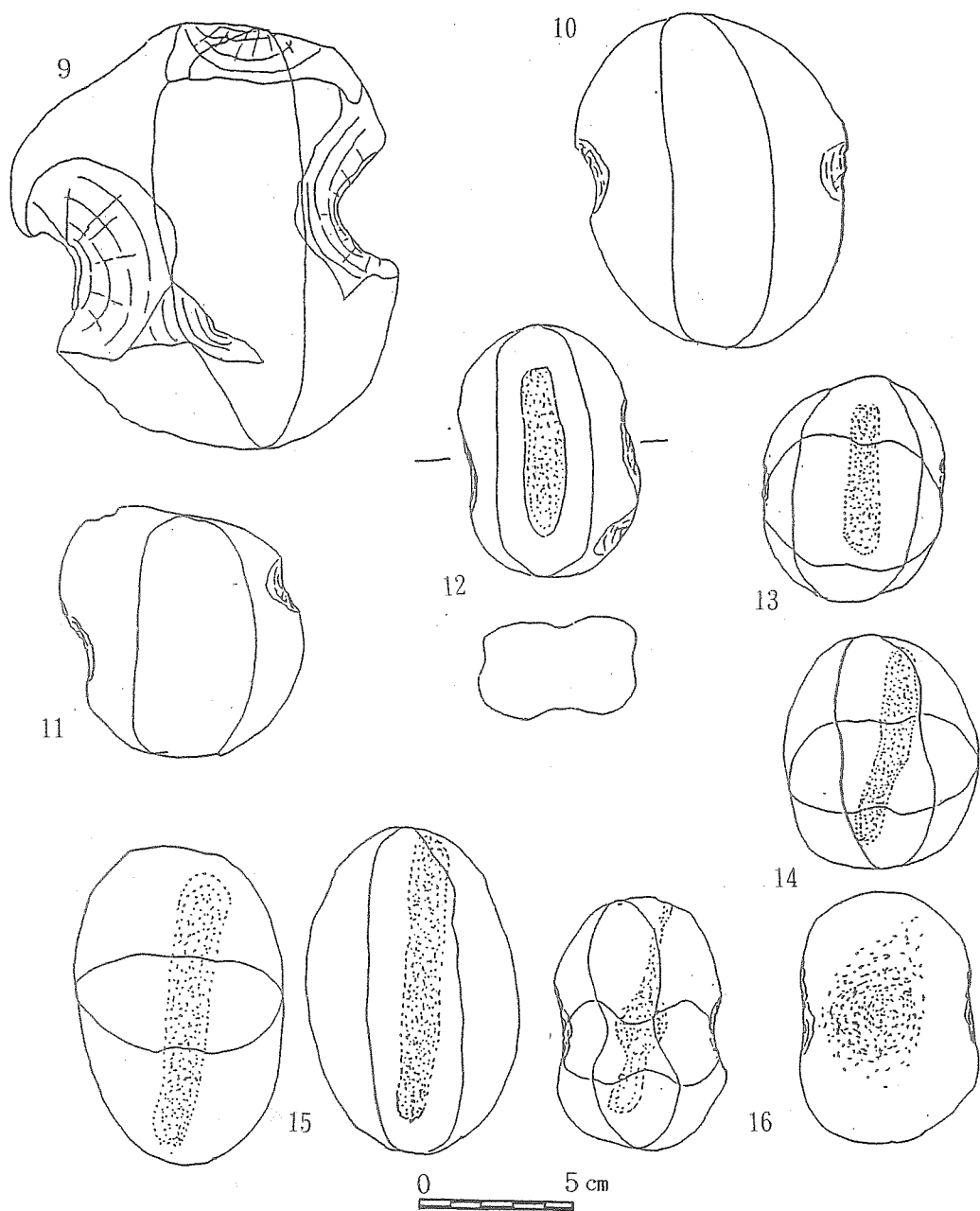


Fig. 2 表面採取の石鍾 (9 伊関浜脇, 10~11 現和泉原 12~16 国上太田)

おおげりいちのとりい

大花里一之鳥居貝塚採集の土器(2)

関 一之

潮流第3号に記載した磨消縄文土器に続き、一之鳥居貝塚採集の同系統と考えられる土器群について紹介する。

一之鳥居貝塚で採集される土器は、指宿式土器がそのほとんどで、明確に他型式と思われる土器は極めて少ない。このことは、本貝塚の重要な特徴のひとつであるが、他の指宿式土器を出土する遺跡同様、磨消縄文土器の共伴関係が確認されている。採集された磨消縄文土器片は前回紹介分をのぞき、7点である。またこれに加え疑似磨消縄文系の土器片の22点を紹介したい。

I 類土器は磨消縄文土器である。(第1図 1~7)

1は、頸部にかけて締めを持ちながら胴部はやや球形ぎみの張りを持つ。文様は2から4条の平行凹線文で長方形の無文帯を区画し凹線文間に斜縄文を施す。長方形の無文帯は一定の面積を持たず、撫でにより縄文が磨消された痕跡が観察され、胴部上位には、鉤手状つなぎ文を描く。焼成は良好であるが、胎土に微量の小石と少量の雲母と石英を含む。内面も外面も全体的に赤褐色を呈するが、胴部下半は煤が付着している。

2は、胴部から頸部にかけての破片である。竹管状工具を用いて2本の平行凹線とその間に施された縄文帯によって文様が斜位に展開される。色調は黄褐色で胎土も精錬されて緻密であり焼きも堅い。

3は、頸部にくびれを持たず口縁部は直行する平口縁である。口唇部は丸みをもって終わる。方形に区画された無文域の外周を囲むように磨消縄文帯で強調しており、篋状工具による整形の後撫でによる調整が看取される。色調は赤褐色で胎土焼成ともに良好である。

4は、平行する2本の凹線文でその間に縄文帯を残し斜行する。色調は赤褐色で、胎土焼成ともに良好である。

5・6・7は、斜位に展開する磨消縄文土器である。ともに竹管状工具による平行線が基調となり、文様を構成する。5・7には、内面にも撫でによる調整痕が、6には条線が観察される。

II 類土器は貝殻腹縁の刺突による疑似磨消縄文土器である。(第1図 8~13)

8は、波状口縁の頂部にあたる部位である。頂部は張りつけにより肥厚しており、また口唇部には1条の沈線をめぐらし、口唇外側端部には爪形の刻みを施文する。色調は黒褐色を呈し、焼きはもろい。

9は、頸部から外反し、口縁部で内湾する形状を呈し、口唇部は平坦部を作り内傾している、深鉢形の土器である。口縁に平行に先端「U」字形の棒状工具を用い、2本の平行沈線とその間に貝殻腹縁刺突文を充填する。胴部から頸部にかけても同様の円文か渦文が描かれている。器面は丁寧な撫でにより調整されており、焼成は堅緻である。色調は暗茶褐色で一部に煤の付着が認められる。

10は、わずかに「く」の字形に肥厚した口縁部と、その肥厚端部に貝殻腹縁による刺突文が特徴的である。凹線下位にそれに平行して貝殻腹縁刺突文が施文される。

11は若干外反する口縁部と平坦部を持ち内傾する口唇部である。口縁に平行に沈線と貝殻による疑似磨消縄文が施される。色調は暗褐色、焼きは良好である。

12・13は、浅い凹線文間に貝殻による疑似磨消縄文が施文される。12は、外面は撫でにより調整されているが、内面は貝殻条痕文を有す。色調は暗茶褐色、焼成は良好である。13は、器厚が4mmで極めて薄い。

Ⅲ類土器は、2種類の施文具を用いた疑似磨消縄文土器である。(第2図 14)

14が1点だけこの分類に含まれる。14は、口縁部は外反する若干肥厚ぎみの波状口縁である。口唇部は貝殻腹縁による押し引き文が施文され、内外面ともに荒い貝殻条痕文で調整されている。口縁部には「ヒ」の字状の区画の中に断面三角形の工具による刺突文と繊維質の先端圧痕文が不規則に施文されている。

Ⅳ類土器は、半裁竹管状工具若しくは棒状工具による2本単位の沈線間に刺突文を充填する土器である。(第2図 15~24 第3図 25)

15は、頸部にしまりを持たず、口縁部は緩く外反する。口唇部は平坦部をもち、外傾する。口唇部には断面「V」字形の沈線が1条めぐる。口縁部には、2本の平行沈線とその間に刺突連点文を施し、文様は比較的奔放なモチーフで展開している。色調は暗茶褐色、焼きも良好である。内外面ともに丁寧な撫でにより調整されている。

16は、1本の沈線を単位とし、その下位に斜め上方より刺突された連点文を施文する土器である。断面を観察すると、2種類の密度と色調の異なる粘土を張り合わせて器壁を形成している。焼きは良いが胎土がもろく、暗茶褐色を呈する。

17は、浅い2本の平行沈線の間に爪形の刺突連点文を施す。内外面ともに貝殻状痕文と撫でによる調整が認められる。暗褐色で胎土はやや粗である。

18は、波状口縁の一部で口縁は大きく外反し、口唇部に刻み目を有す。2本の沈線が接続しており本来の文様帯を持たない。このため、連点文は沈線に重なるように施文されている。色調は、暗茶褐色で胎土に小砂粒を含む。

19は、緩く外反する口縁と丸みをもって内側に傾斜する口唇部である。口唇部には爪形の連点刺突文を刻み目状に施す。文様は横走する2本の沈線とその間に爪形の刺突文がみられる。色調は茶褐色、胎土、焼成ともに良好である。

20は、半裁竹管状工具による浅い刺突文が施文されている。外面は貝殻状痕と撫でによる調整で内面は貝殻状痕文が見られる。

21は、頸部にくびれを持たず、胴部から口縁部にかけて直口するが、胴部下半にかけてはわずかに丸みを持つようである。口唇部は平坦部を作りわずかに内傾する。文様は2本単位の沈線をめぐらせ、その間に刺突連点文を施文する。横走する2組の文様に懸垂する文様と「つ」の字状に曲がる文様が特徴的である。色調は暗茶褐色、部分的に煤の付着が認められる。

22は、先の鋭い棒状工具により連点文が施文される。

23は、内湾する口縁部である。口唇端部に粘土紐の張り付けを行い、その上に浅く間隔の狭い刻み目を施す。口縁部の文様は2列1単位の連続した半裁竹管文が斜め上方より刺突されている。色調は灰褐色で、胎土、焼成は極めて良好である。

24は、文様帯の中の施文は、竹管系と思われるが不鮮明である。

25は、胴部が張り、頸部でやや締めりながら外反する口縁部を持つ深鉢形の土器である。波状口縁の頂部には「ハ」の字状の刻み目を3対有すると思われ、口唇部は丸みをもって終わる。文様は、胴部から頸部にかけて施文されている。2本の平行する凹線とその間に短凹線を施し、波状口縁頂部下に鉤手状つなぎ文から発展したと見られる渦文が描かれる。復元口径は、26.6cmを計る。色調は黄茶褐色で胴部最大径の部分を中心に幅約8cmの煤帯がめぐる。

V類土器は、沈線間に篋状工具による刺突文を施す土器である。(第2図 26~29)

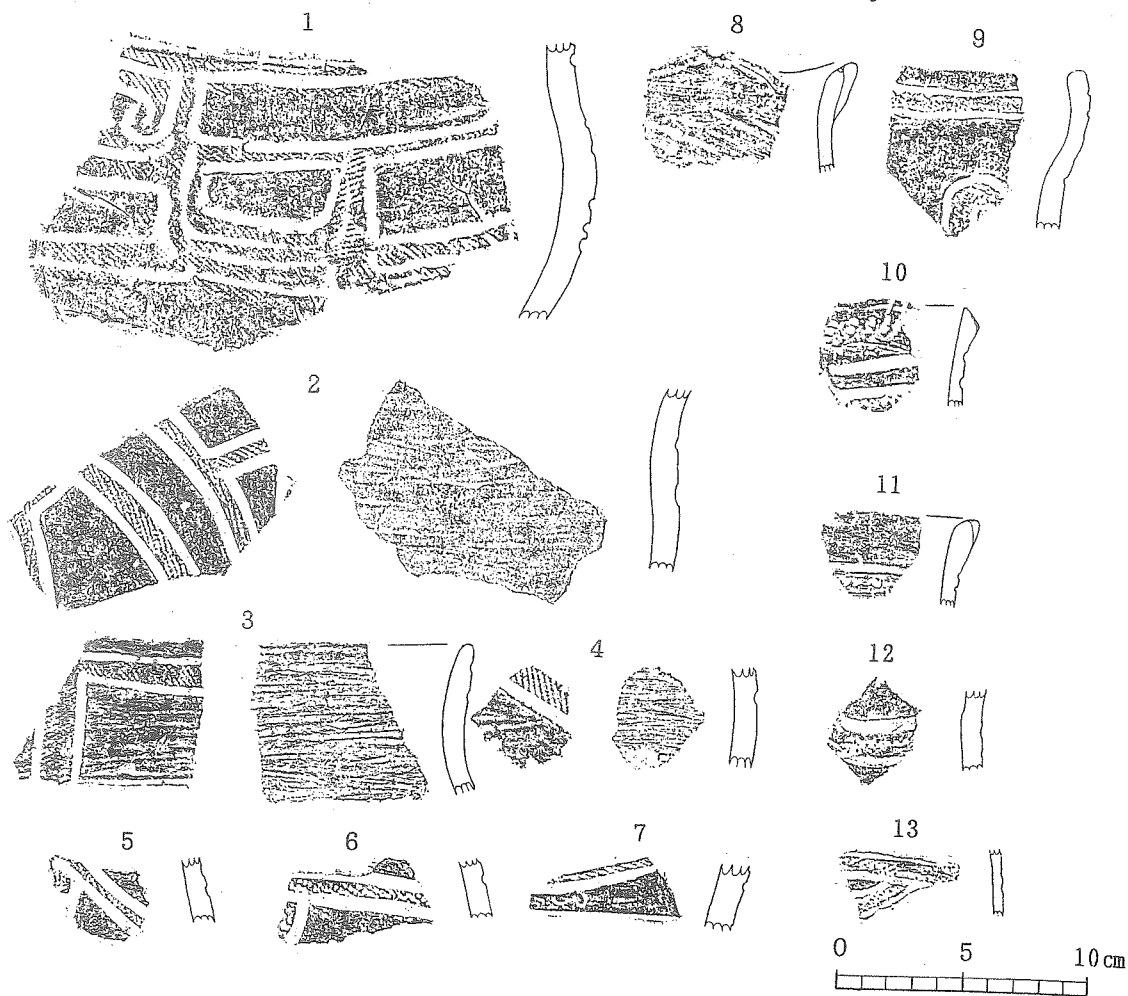
26は、15の土器とよく似ているが沈線間の施文具は、篋状の工具を用い文様が細く、鋭利で深い。黒褐色を呈し、内外面ともに撫でて調整している。

27は、わずかに波状する口縁縁を持つ比較的小型の土器である。横走る3本の平行沈線間に羽状に刺突文を施文しており、胎土には金雲母を含むが不純物が多くもろい。

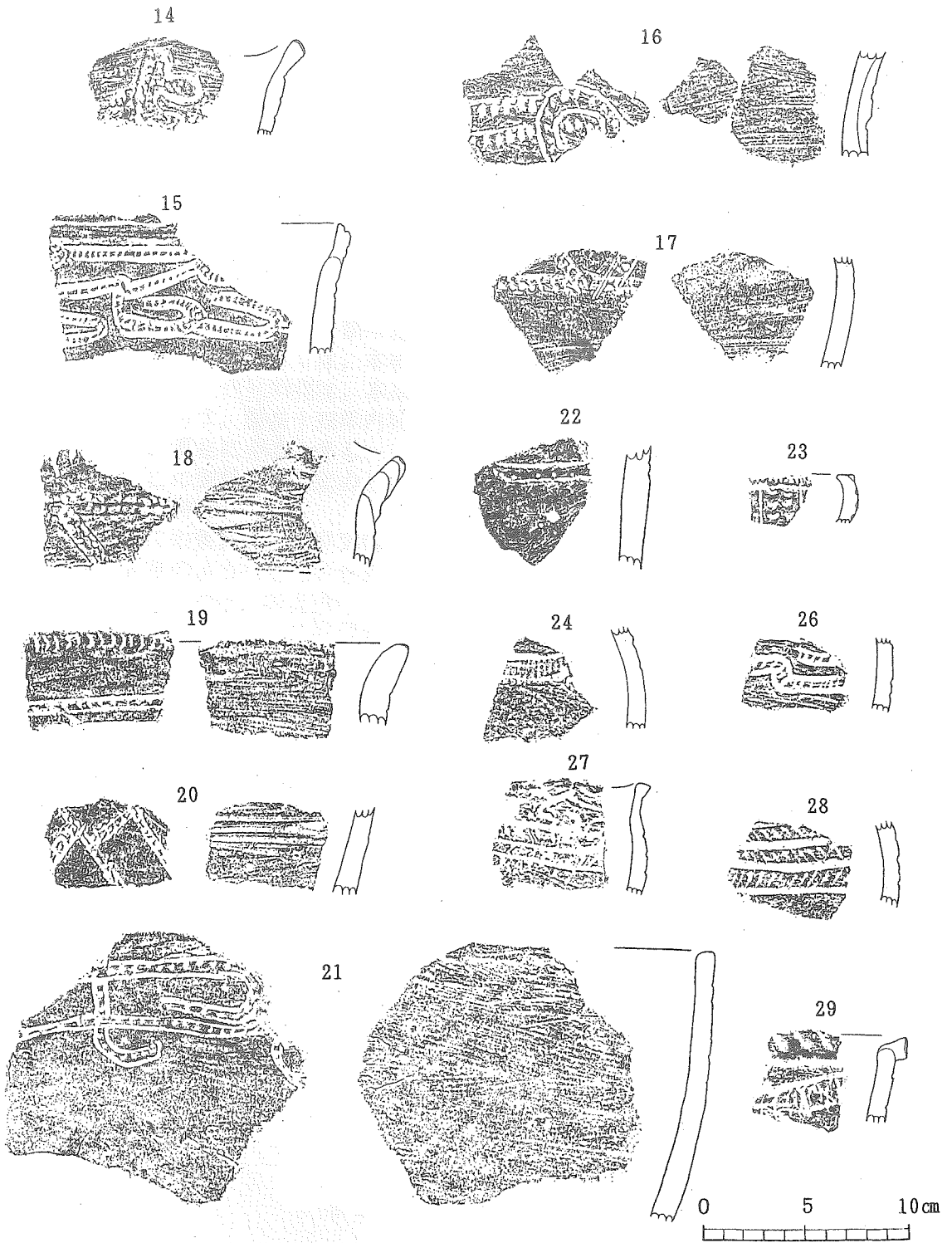
28は、4本以上の横走る沈線間に、篋状工具により斜位に連続して刺突文を施文する。色調は黄茶褐色で、胎土に金雲母を含む。

29は、胴部から直に立ち上がって口縁部で急に大きく外反する。口唇端部には篋をねかせて、押圧による連続文を描き、口縁部には、雑な刺突が施されている。胎土は荒く金雲母を含む。

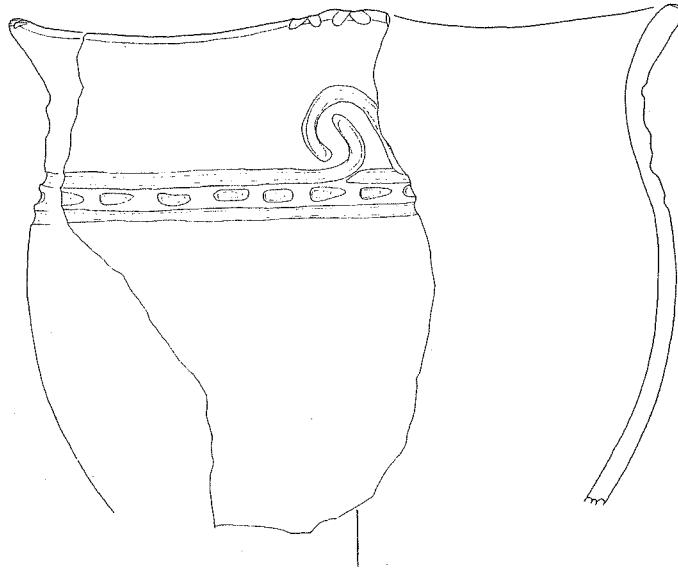
ここに紹介した2類から5類までの土器がすべて疑似磨消縄文系の土器であるか疑問は残る。磨消縄文を意識し、そこから派生した文様と、単に平行沈線間に文様を有するタイプも存在すると考えられる。採集資料で、層位的に不明であり、類似の文様を持つ他型式との誤認もあるかと思われる。大方の御叱正・御教示をお願いしたい。



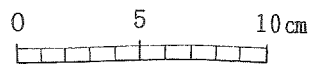
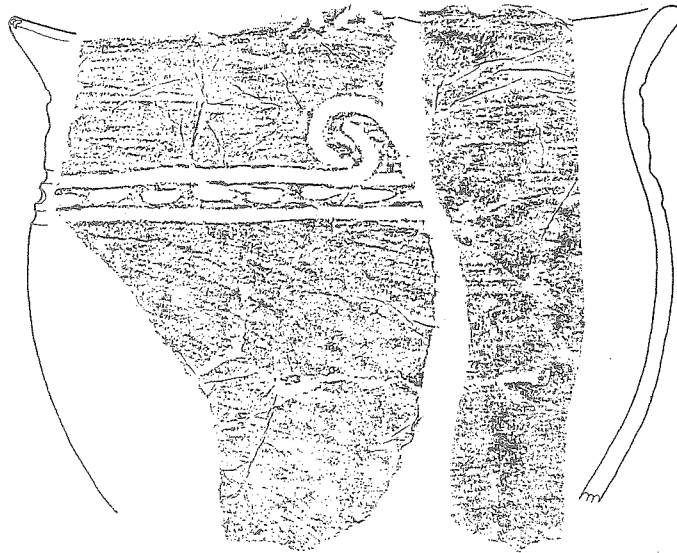
第1図 一之鳥居貝塚採集の土器



第2図 一之鳥居貝塚採集の土器



25



第3図 一之鳥居貝塚採集の土器

《資料紹介》

鮫島 安豊

1. 青磁片(青磁蓮弁文碗 越洲窯?)

- ◇ (採集地) 西之表市中目字川上屋敷
- ◇ (採集期日) 平成3年7月21日
- ◇ (採集の状況)

採集地は、種子島氏の居館赤尾木城跡(現、榕城小学校正門)前の通称川上屋敷の北一角で、周囲は、新屋敷、井上など旧家老屋敷群が所在する。正確には、旧、字名城内である。赤尾木城は、寛永元年(1624)種子島忠時が館を構えて以来、明治元年まで歴代の島主の居館であった。

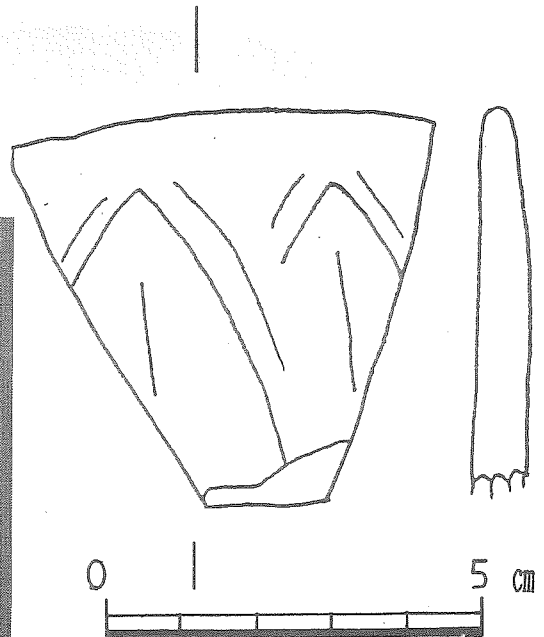
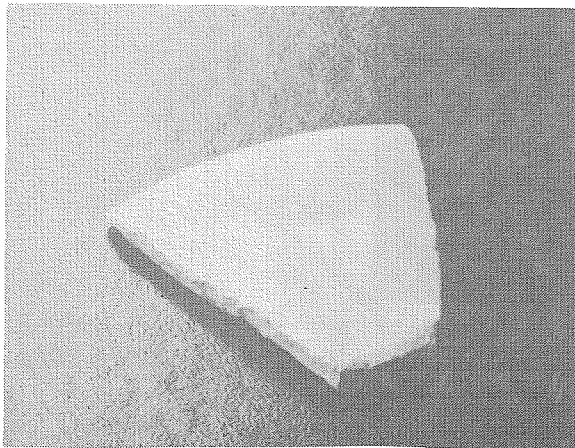
歴代の島主は、「懐中島記」(元禄2年上妻隆直著)によると、初代信基から六代時充までは、本城。十二代忠時は、池田黒山尻。十三代恵時は、屋久田。十四代時堯は、本源寺の地、のち内城。十六代久時は、野久尾のち石峰と号す。慶長十四年内城に移る。十七代忠時、寛永元年内城上の屋地に移し、現在に至るとある。

この資料は、上記のとおり、その一角の土手崩壊にて採集したものである。

◇ (資料の特徴)

この資料は、蓮弁文碗の口唇部と蓮弁2弁を残す破片である。色調は、龍泉窯のような明るい色調を持たず、全体的に暗い感じで、鋭く力強い彫りの深さはなく、越洲窯のものと考えられるものである。

「潮流1号」で現和西俣院坊出土の灰釉長頸瓶(猿投窯)に共伴した越洲窯青磁破片について、亀井明德氏が、この時期の資料の種子島に於ける意義づけについて述べておられるので、ここでは、省略したい。



2. 青磁片（青磁蓮弁文杯 越洲窯？）

◇（採集地） 西之表市中日字井上

◇（採集期日） 平成3年8月1日

◇（採集の状況）

前記の資料を採集して10日経過してから再び周辺を注意して廻ったところ、前記の採集地から約20メートル離れた字井上の土手から、青磁破片を採集することができた。採集場所の歴史的な環境については、既に述べたのでここでは省略する。

◇（寸法） 器高3cm 直径10.2cm 底部径6.8cm

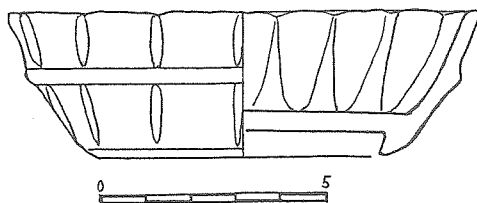
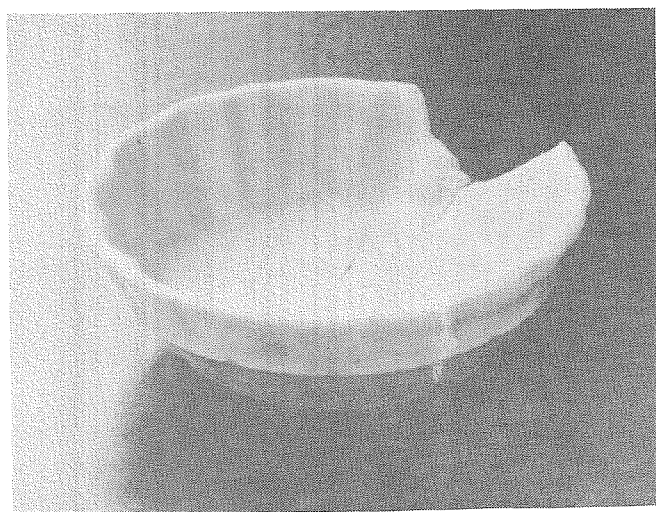
◇（資料の特徴）

口唇部の一部を欠損し、3個に割れているが、ほぼ完形品に近い。器の内面は、輪花状を呈し、そのため口唇部は、幾分波状を呈する。底部の中心部分は、緑釉がかっている。先述の資料より、幾分全体的に明るい緑色を呈する。胴体部分に竹節状の突帯が一周する。

資料についての学習をする過程で、この資料と全く同一の資料が沖縄県今帰仁城跡から出土していることが、わかった。貿易陶磁研究No. 3 (1983) 32ページに報告されている。報告を読む限り、全く同一の資料とみられる。今帰仁城跡の資料の時期は、元様式の磁器が主体のようであるが、この青磁も、特徴からして、同時期の越洲窯のものと考えられる。

◇（参考文献）

1. 東洋陶磁の展開（大阪市立東洋陶磁美術館発行）
2. 日本出土の中国陶磁（東京国立博物館編）
3. 中国陶磁の鑑定と鑑賞（常石英明著 金園社）



あとがき

あじさいの花が咲く頃に…と予定しておりました第5号を、やっとのことでお届けすることができました。いつのまにか景色は夏から秋へそして冬へ、いつもながら予定どおりに進まぬ発刊計画、生み出すことは苦痛の連続、継続することは非常な努力だと感じてます。

今号から、広く歴史・民俗・紀行文も取り入れ、掲載内容が一段と幅広いものになりました。考古学研究会誌としては、少々趣を異にする感じもしますが、この形も種子島で発行する以上、必要なことであります。かって、種子島には「ちくら」という郷土誌があり、種子島に関するありとあらゆる記事が掲載され、今日では、貴重な資料となっております。しかし、これまでどおり、考古学および地質学などに関する玉稿は、勿論引き続きお願いしていきますが、地元の歴史や民俗などの研究の発表の場としても役割を果たして参りたいと思います。今号では、種子島の郷土史家の第一人者である平山氏、仏教史の研究のため東南アジア・中国をフィールドにしている高重氏、前西之表市図書館長の三浦氏、本会長の上妻氏、前号からご寄稿いただいている成尾氏、奥野氏、また関氏などのご寄稿により充実した内容となりました。高重氏の紀行文はページ数の関係から次号に連載することになった。ご寛容願いたい。

編集局の手違いもあって、発行予定が遅延したことをお詫びし、次号からの更なる御指導と御鞭撻をお願い申し上げます。

平成3年12月 孟冬 (鮫島記)

種子島考古学研究会誌

『潮流』 第5号

1991. 12. 1

発行所 種子島考古学研究会

〒 891-31

住所 西之表市西之表9939 上妻方

TEL (09972) 2-0924

THE JOURNAL
OF THE
ARCHAEOLOGICAL SOCIETY OF TANE-ISLAND
"TYORYU"

— No 5 —

DECEMBER 1991

Takeaki HIRAYAMA
The Island of Producing Iron

Yosimi TAKASIGE
The Journey of The Konan District

Yasunori MIURA
The Biography of Kumage-nyudou

Hideto NARUO and Mitsuru OKUNO
Study-history of Kikai-Akahoya Ash

Toshio KOUZUMA
Reconsideration of IMAHIRA No1 Tumulus
Excavated

Yasutoyo SAMESHIMA
The Exercise of The Archaeological
Stone Sinkers by The Folk Material II

Kazuyuki SEKI
Potteries Collected from Ichinotorii
Shellmound in Ougeri

Yasutoyo SAMESHIMA
Introduction of New Excavated Articles

THE ARCHAEOLOGICAL SOCIETY OF TANE-ISLAND

7465 Nishinoomote Nisinoomote-City, Kagoshima, Japan